



北浦和

コーヒーハウス

もうひとつの天路歷程

金時 豆太郎

第1章 温泉

1 温泉

長野県の別所温泉には、上田駅から別所線というローカル線でいく。珍しい丸窓で知られている二両連結の電車は、窓を開け放してゆっくりと走る。まだ青い稲穂が車窓にゆれる八月初めの夏日だ。入道雲が青空の遠くに見える。

午後の早い時間の車内に乗客は少ない。先頭の車両の中ほどに高校生くらいの二人の女の子が並んで座っている。フレンチ袖の白いワンピースを着た一人は、長い髪を風に揺らしながら向かいの窓から見える山々に見入っている。もう一人は、ジーパンにTシャツ、おかつぱ頭で黒縁の眼鏡をかけ、それが癖なのか腕組みをしている。二人は高校生の女の子にしては静かにのんびりと言葉をかわしている。

「ねえ、芳子と一緒に温泉に行くのは、もう三回目だね」と髪の長い娘。

「うん、そうだね。美香と一緒に旅行って、あまり気を使わなくて好きだよ」とおかつぱ髪の娘。

太縁メガネのおかつぱ娘が、男の子口調で、さらに言う。

「美香とはさあ、おしゃべりする時はけっこう盛り上がるけど、黙って一緒に本を読んでいることもできるしさあ。なんか楽なんだよ。前に見た映画で『ある愛の詩』っていうのがあるんだけど、主人公の恋人たちが寄り添いながら黙って本を読んでいるところがさ、いいじゃんって思ったよ」

髪の長い娘が両足をパタパタと揺らしながら答える。

「ふーん。そういえば私も、なんていう映画だっけ、えっと、『ノッテンヒルの恋人』とかいう題の映画の中でね、恋人の二人が芝生に寝転んで本を読んでいるの。いいなあと思ったわ」

「あたしたちって恋人同士ってこと？」

「やだ、二人とも本を読むのが好きってことでしょ」

「結婚しちゃおうか」

「やだー、止めてよ」二人は大きな声で笑った。乗客たちが振り向いた。やっと女子高校生らしい風景になった。

いつもは民宿やユースホテルなどの安宿を探すのだが、今回は上田市にある美香の父親の実家に泊まった。一人で暮らしている祖母は大歓迎で、手作りの信州そばをふるまってくれた。

温泉地に着くと町なかを散策し公共浴場を探して入る。料金が一回五十円などという安いところも結構多い。この日はゆっくりと三軒の風呂屋を回った。浴槽がヒノキ作りであったり岩を積んで作られていたり、それぞれに個性があって楽しい。

二人の旅行の理由は「温泉好き」ということではなかった。本当の目的は、「小人たちの住む小山を探すこと」だ。二人の愛読している物語には「小人の住む小山の近くには必ず温泉が湧いている」と書いてあった。しかし小人たちに気に入ってもらえた人でなければ決して見つけることはできない。

「心から願ってれば、きっと見つけることができるよね」

少女たちは励まし合った。

地元の人から、近くの青木村というところに新しく見つかった温泉があることを聞いた二人は、旅行の二日目に行ってみることにした。その温泉はまだ見つかったばかりで、ブルーシートで囲ってあるだけだという。

「ねえ、男女混浴だったらどうしよう」

「そんなことはないよ。大丈夫だよ。混浴だったらバスタオルを巻いて入れればいいし……」

「だって、男の人はタオルなんで巻いてないでしょ」

「あっ、そうか」

あはははは、と目に涙を浮かべて二人は笑った。

次の日、目指す温泉は青木村の谷あいを登ったところにあった。幸い、バスが近くまで通っていた。山の斜面に近い畑の中に、それはあった。うわさどおり、材木で簡単な骨組みを作ってブルーシートで周囲を囲っただけの、青空の下の温泉だった。浴槽も材木で作られていたが、お湯が漏るのだろうか、やはりブルーシートで覆われている。しかし、かろうじて男女の浴室と脱衣所は区別されていた。ここに来るのは、近所のおじいさんとおばあさんだけのようだった。農作業の帰りに汗を流していくというわけだ。

美香と芳子は目を輝かせた。

「きつとさ、来年の今頃には、もっと立派なお風呂になっちゃってるよね」と、長い髪的美香。

「うん。今だけの、幻の温泉だよ」と、おかつぱ髪の芳子。

二人の目は、遠くを見ていた。

帰りのバスが来るまでには、ずいぶん時間があつた。二人は朽ちかけたベンチに座りながら待った。陽はまだ高く暑さが残っているが、さわやかな風が吹いている。美香は長い髪を頭の上でまとめて、長い箸（はし）のようなかんざしで留めている。芳子は濡れたおかつぱ頭に手ぬぐいをかぶせている。ドライヤーが使えなかったからだ。

芳子が話を向けた。

「そういえば、美香のところのソランちゃんはどうなった？」

「ソランちゃんはねえ……。まだ飽きないみたいよ。日曜日は家族でお昼を食べながらテレビの『のど自慢』を見るんだけど、終わったら急いで出かけて行くわ。コーヒーハウスに」

「そうなんだ……。うちのお母さんはクリスチャンなんだけど、そこは良くないって言ってたよ」

「どうして？」

「良くわからないけど。異端なんだってさ」

「異端児ってこと？」

「そこの人たちは『イエス様を信じていないのよ』って言ってた」

「ふ～ん。でも、時々家に依田さんっていう人が来るのだけど、『イエスの教えはいいですよ、美香ちゃんも聖書を学ぶといいですよ』って勧められるわ。いい人よ、依田さんって。六十歳くらいのおじいちゃんなんだけど、なんかかわいい人だわ」

「へえ。私も子供の時はお母さんに教会に連れてかれてたんだけど、牧師さんのお話が終わった後に公園でバレーボールをして遊んだこととか、クリスマスに並んで歌を歌ったことしか覚えてないし、中学生になってからは自然に行かなくなったな。お母さんも今は聖書を読んでいるところなんて見たことないし」

「依田さんは聖書を良く知っているわよ。いつも聖書を手に持っているって感じ。何か思いつくと、スルッと聖書を開いて見せてくるわ」

「ふ～ん、そーか」

芳子は空を見上げて首を振りながら、おじさんみたいに言った。

「クリスチャンも、内輪もめをしてるのかね」

美香が思いついて言った。

「ああ、そうだ。芳子は手話に興味があるって言ってたわよね。コーヒーハウスの集会では、耳が聞こえない人たちも少し来ていて、手話で通訳もしてるんだって」

「ほんと？ 手話か……」、芳子は考える。

高い空をトンビが舞っていた。近くの崖に巣を作っているのだろう。

美香がため息をつき、つぶやいた。「異端児か……」

芳子がため息をつき、つぶやいた。「異端児ね……」

それぞれの友だちから変わり者とみなされている二人には共通する思いがあった。

二人の髪を揺らすさわやかな風が、さあっと吹いた。

緑色をした小さなカエルが草むらからのんびりとした目で二人を見つめていた。

第2章 出会い

2 出会い

物語は、温泉娘たちの旅行よりも八ヶ月ほど前にさかのぼる。

もうすぐ十二月の、肌寒くなってきた日のことだ。埼玉県のパルメディカル病院の銀杏(いちよう)並木は明るい黄金色の葉をあたり一面に散らしている。非番の職員なのだろうか、気の早い男女が楽しげな声を上げながらクリスマスツリーを正面の丸い花壇に立てている。

杉本空歩(そらん)は三階の病室の窓から見下ろして、銀杏の葉があんなに地面に散らかっているのに美しく見えるのはなぜだろう、とぼんやり考えていた。髪をきちんと分けることが苦手なうえに入院中ということもあって、すこし癖のある髪の毛はあちらこちらを向いて突き出している。最近は若く見られることが悩みの種となっている。

二日前、息子の友達たちと久しぶりにバスケットボールをした時に、左の足首に不思議な痛みが走った。アキレス腱が切れた、とすぐに悟った。「まずい、明日から名古屋に出張だ」と、とっさに思いがよぎったが、どうしようもない。息子の友達の父親に車で病院まで送ってもらい会社に必要な連絡を済ませると、はじめの後悔の念は徐々に消えて、人生で初めての入院を面白い余裕が出てきた。

杉本の妻の和歌子は家から持参したティーポットで紅茶を入れている。牛乳と砂糖をたっぷり入れた紅茶は杉本の好物だ。「紅茶は男の飲み物さ」が口癖だ。普段は砂糖を多く入れることに口うるさい和歌子も、今日は特別よ、という顔をしている。

杉本の左足のギプスには見舞いに来た家族と友人たちの落書きがしてある。「パパの足はすごくクサイ」と書いたのは高校一年生の娘の美香だ。中学一年生の息子の直樹は「ドラゴンボール」の「悟空」を描いた。もちろん「カメハメ波」が火を吹いている。小学三年生で末の息子の悟は「パパ愛してるよん」と書いた。もちろんハートマーク付だ。会社の友人たちが何人か来て、それぞれふざけたことを追加していった。杉本自身は、子供の頃にいつも描いていた「鉄人二十八号」や「伊賀の影丸」を得意になっていくつも描いた。

「ねえ、何かほしいものはない？」と和歌子が尋ねる

「う～ん、なんか、厚い本でも読んでみるかな。何がいいかな」と杉本。

「時代物がいいですよ。司馬遼太郎なんかどうですか。藤沢修平の剣豪シリーズも面白いよ」と隣のベッドの男が口を挟んだ。男はまだ五十代だが薄くなった髪を気にして、どうせならと、すべて剃りあげてしまっている。枕元にはたくさんの文庫本が積まれていた。

「いっそ『宮本武蔵』を全部読んじゃおうかな」と、杉本は陽気な隣人に話を合わせる。

突然、聞きなれない、少し高い声が聞こえてきた。

「聖書なんかどうですか」

初めて見る松葉杖の男が、開け放しの病室の入り口に立っていた。
「どうも。隣の部屋の者です。難しいけど、いい本ですよ、聖書って」

同じ患者であるという意識は、初めての間にも親しい気分を持たせるものようだ。杉本も気楽に答えた。
「聖書ですか。いつか読んでみたいとは思っていましたが。やっぱり旧訳聖書がいいですかね。どうせ読むなら古い翻訳のほうが本格的な感じがしますよね」

「いや、実は旧約とか新約という言葉の約の字は、翻訳の訳ではなく、契約とか約束の約なのですよ。私をはじめは知らなかったのですが……。簡単に言えば、イエス・キリストという人が生まれる前に書かれたのが旧約聖書で、生まれた後に書かれたのが新約聖書と呼ばれているのです。書かれた言語も違うのです」

六十歳くらいに見える小柄な男は松葉杖を持って余しながら、杉本のベッドの脇に置いてある見舞い客用の折りたたみ椅子に腰をおろした。

興味を持った杉本は男に尋ねる。

「くわしいのですね。クリスチャンなんですか」

「ええ、そうです」

「カトリックですか、プロテスタントですか」

白髪の混じった、くしゃくしゃな髪をした男は、一瞬躊躇（ちゅうちょ）したように見えたが、答えた。
「……そんなに大きな教会ではなく、もっと小さいところです。あの……、ウィリアム・ウィストンという人をご存知ですか」

杉本は聞きなれない名前を口の中で繰り返してみた。

「ウィリアム・ウィストンですか。ウ、ウィストン……ウィストン……。あっ」

ひらめいた。

「あのシャーロック・ホームズの助手だった人ですよね！」

「それはワトソンでしょ」と隣のベッドの、時代物好き男が真顔で言った。

松葉杖の男は、とっさには理解できなかつたようだったが、すぐに、あははははと大きな声で笑った。なかなか笑いは止まらなかつた。生真面目な男のつぼにはまってしまったようだ。

窓の外では一陣の風が、銀杏の黄金色の葉を宙に吹き散らしていた。

杉本空歩は、この日に確かに始まった「旅路」に、まだ気づいてはいなかった。

第3章 北浦和コーヒーハウス

3 北浦和コーヒーハウス

杉本空歩の家は浦和市の郊外、隣の与野市に近いところにある。荒川が近くを流れている。珍しい野鳥が来ることで知られている秋が瀬公園にも自転車で十分くらいで行ける。八年前に少し無理をしてローンで購入した建売住宅だ。同じような設計の家が他にも十数軒、固まって建っている。小さな庭の芝生もようやく根付き、何本か植えた木々もしっかりしてきている。去年の春に近くの野原で見つけたオオイヌノフグリもあちこちに植えてある。

四月になって間もない日曜日の朝、洗濯物を干しに外に出た和歌子は、この空色の小さな花が遠慮がちに咲いていることに気づいた。

「わあ、咲いてる。かわいい！ ウェルカム・トゥー・マイ・プレイス！ ……違った、アワー・プレイスね」小さな花をそっと手でなでてから立ち上がり、思わずぐるりとターンをする。そして急に恥ずかしくなって隣家を見まわした。

和歌子は自分では女優の酒井和歌子に似ていると思っている。たまに他の人からも言われることがあるが、その時は内心、有頂天になる。

和歌子のターンを見ていた黄色いインコが、リビングルームの鳥かごの中から「おーいミズシマ」と、誰かを呼んでいる。インコの名前はクッキーだ。和歌子が名付けた。

鳥かごのすぐ下では三十匹ほどの小さなグッピーたちと二匹のエンゼル・フィッシュが彼らの世界の中で生きている。水槽の外にも大きな世界があることを彼らは知らない。

長女の美香は春休みなので、昨日から一泊の旅行に出ていた。いつもの温泉めぐりだ。休み明けには高校二年生になる女の子には珍しく、一人で出かけることが多かったが、今回は浦和市にある女子高校に入学して「古代史クラブ」に入ってから友達になった芳子との二人旅だという。

中学二年生の直樹はいつ起きてくるのかわからない。このところ笑顔が少なくなったことが父と母の心配となっていた。

小学四年生になる悟は早起きしてテレビを見ている。学校のある日はなかなか起きてこないのに、日曜日だけは早起きしてテレビを見る。今日は休みだ、と思うと嬉しくて、早く目が覚めてしまうらしい。船乗りになって世界中を旅行するのが夢で、外国の風景や海の出てくる番組を好んでみている。七時からの「日本の漁業」がお気に入りだ。その後、十時からの「世界の旅」は絶対にはずせない。

日曜日の昼食はたいていスパゲッティになる。杉本はゆで係りだ。最近は麺を少し硬めにゆでることを覚えた。ゆでたてのスパゲッティは、それだけで十分おいしい。炊き立てのご飯が、それだけで十分おいしいのと同じだ。以前はご飯が無くては、うどんもラーメンもスパゲッティも食べた気がしなかった杉本だが、今はご飯無しでも満足できるようになった。

「ソランが日曜日の午後にお出かけするなんて珍しいわね」

テレビの「のど自慢」を見ながらの家族そろった騒がしい昼食が済んで、あわただしく自転車にまたがった杉本に和歌子がベランダから声をかけた。

「うん。やっぱり気になってね。例のところを探してくるよ」

「ワン」と柴犬のテリーが返事をした。

いい天気であった。自転車は久しぶりだな。子供の頃は自転車で知らない道を通ってどこまでも探検するのが好きだった。でも今日は時間もあまりないし、冒険はできないな。

杉本は、埼大（さいだい）通りと呼ばれている大通りに行くことにした。これなら北浦和駅までまっすぐだ。反対方向に行けば、国立の埼玉大学に行くことができる。杉本の母校だ。妻の和歌子と知り合ったのもこの大学だ。

教育学部を卒業して小学校の教師になった。これは自分の天職だと思っていた時もあった。生徒に慕われる教師だった時も確かにあった。教師になって四年目に、五年生の担任になってしばらくは順調だった。皆にいじめられる生徒をかばったのがきっかけだった。

「先生はえこひいきしてるわ」

クラスの中でも人気のある女子生徒の言葉に、一人また一人と他の生徒たちも加わった。最後にはクラスの授業がまったくできなくなってしまった。学級崩壊だ。生徒の父母からも苦情が続いた。

女子生徒にわかってもらおうとして二人きりで話し合ったことも裏目に出た。

「先生が私の体をさわった」と言われてしまったのだ。

杉本空歩は、あれほど愛していた教師の仕事を止めた。

杉本はこの道の両端に植えられたケヤキ並木が好きだ。葉の無い、枝が扇状に広がった冬の姿も美しい。夏になって道路全体が日陰になるほど緑の葉が茂っている時も大好きだ。今は、ほとんど裸の枝に若い新緑の葉が芽吹きはじめていた。ダンガリーのシャツ一枚でも寒くはない。

途中にお気に入りの幼稚園がある。古い作りだが雰囲気がある。緑色に塗られた、開き戸になっている雨戸が、全体の落ち着いた外観のアクセントになっている。切り妻屋根の建物だ。『まあ、小さな「グリーンゲイブルス」という感じだな』杉本の青春時代からの愛読書である「赤毛のアン」の家だ。こんな家に住みたいと、通るたびに考えていた。建物の端には、あとから付け足したように、丸い屋根の、塔のような部屋がある。あそこが書斎になるな、と杉本は想像していた。

そういえば和歌子と付き合うようになったころ、ふるさとの長野県の「ビーナスライン」をドライブした時に、女神湖の近くにも『グリーンゲイブルス』という名前の小さなレストランがあった。二人で紅茶を飲んだ。今もまだあるのかな。

ゆっくりと自転車を走らせ二十分くらいで国道まで来た。胸ポケットにしまっておいたカードをもう一度確かめた。茶色のカードには、

北浦和コーヒーハウス

《 原始キリスト教研究会 》

例会： 聖書講義・基礎研究 《日曜午後二時》

聖書討論 《木曜午後七時》

随時： 個人聖書研究

お気軽にお立ち寄りください。寄付は集めません。

コーヒーその他 無料です。

と印刷されており、裏面には簡単な地図と番地が描かれていた。表面には手書きで『依田純一』と書かれている。

あの松葉杖の男の名前だった。

第4章 ウィストン

4 ウィストン

杉本は、入院している四日の間に、依田純一と交わした会話を思い返した。病棟の三階の端にある小さな休憩所にはほかに人影はなかった。何かの昆虫でもいるのだろうか、観葉植物の葉がときおり揺れた。

小柄な依田は椅子に座るとさらに小さく見える。両手を両ひざにそろえて置きながら話す依田が、少年のように思える時があった。

「万有引力の法則で有名なアイザック・ニュートンをご存じでしょう。そのニュートンの後輩の若い数学者がウィリアム・ウィストンという人です。彼も優秀な学者で、船の航海の時に緯度を測る装置を工夫して作ったりもしました。数学者としても優れていてニュートンの後を受けて名誉あるルーカス教授職につきました。

牧師の息子だったウィストンは、これもニュートンの影響もあり聖書の研究にも熱意をもって取り組みました。やがて彼は正統的教会の教えに偽りが入り込んでいることを悟ったのです。つまり『正統』とされる、アタナシウスが提唱した三位一体という教えは聖書の中には教えられてはおらず、むしろ『異端』とみなされ迫害にあった、アリウスの教えこそが正しい教えであると悟ったのでした。

ウィストンは教会の指導者に直訴しますが取り合ってもらえず、それどころか異端のそしりを受けて、数学教授としての立場も剥奪（はくだつ）されてしまいました。実はニュートンも、ウィストンと同じ信念を抱いていたのですが、名誉を失うことを望まなかったので本心を隠したままでした。ニュートンの信念が明らかになったのは死後に発表された著作によってでした。一方、一途なウィストンは声高に信念を叫びつづけ、やがてすべての職を失ってしまうのです」

「へー、そんな人がいたんですね。ニュートンは有名ですから知っていましたが、ウィストンは知らなかったなあ。勇敢な人ですね。……ニュートンは、ちょっと卑怯な感じだな」

杉本の頭には、リンゴの木の下で、すまなそうな表情をして肩をすくめるニュートンの姿が浮かんだ。

依田純一は話を続けた。

「ウィストンは十八世紀のロンドンで流行していた『コーヒーハウス』と呼ばれる喫茶店で学問を教える道を見出しますが、彼の講義はしばしばアリウスの教えの説明に逸れていったようで、そんな彼の言動を非難する人たちもいたようです。

ウィストンが最もその名前を知られているのは、西暦一世紀のユダヤ人歴史家ヨセフスの著作の、英語への翻訳者としてなのですが、彼自身が書きたいいくつかの本も注目を集めました。特に『原始キリスト教復興』という名前の本は、私たちの集まりのきっかけを作った本となりました。西暦一世紀に生きたキリストとその直接の弟子たちが信じた教えに戻らなくてはいけないというのがその本の主張です」

「なるほど、初心に帰れということですね」

「二十世紀の初め頃、ヨーロッパと世界を巻き込んだ第一次世界大戦後、世界はそれまでの秩序と将来への楽観を失ってしまいました。

そんな中でイギリスに生まれた、やはり牧師の息子のジョナサン・パロットという人は、ウィストンの『原始キリスト教復興』に出会い、衝撃を受けるのです。人間の限られた理性では理解できないという理由で、疑うことを禁じられてきた『三位一体』や『地獄の責め苦』などの教えが、聖書の光に照らしてみると偽りであることは明らかであるようにパロットには思えました。

『三位一体や靈魂不滅の教理はイエスの教えをゆがめてしまった。薰り高い純粋なぶどう酒のようなキリストの教えに不純物が混ぜられてしまったのだ』とパロットは書いています。やがてパロットは同志を集めて小さな『原始キリスト教研究会』を開くようになります。これが彼らの正式な名称となっています。

彼らはウィストンに敬意を表して、集まる場所を、『コーヒーハウス』と呼ぶようになりました。このグループ、つまり私たちのグループは熱心な宣教活動でよく知られていて、イギリスを始めとして世界各地に広まりました。特に第二次世界大戦後は急激に数を増やし、現在ではイギリスに十万人くらい、アメリカにはもっと多くて十五万人くらいいます。日本は急成長して現在一万人を超えました。

世界の合計は五十万人くらいになっています。相変わらず、正統派のキリスト教会からは、『聖三位一体』の教理を信じないという理由で異端とみなされ、世界中で迫害を経験しています」

もちろん杉本が記憶できたことはもっと限られた情報であったが、概要を思い返すことはどうやらできた。もっとも、依田純一が胸を熱くして語った、聖書の教えそのものは杉本の頭を通り過ぎてしまっていた。

「イエスは私のヒーローです。憧れの人です。イエスのように私はなりたい」という依田純一の言葉だけは、なぜか杉本の思いに刻まれていた。宮沢賢治の詩みたいだと思ったからかも知れない。

「まずは聖書を読まなくちゃ始まらないだろう」と考えて、杉本は無知な自分を慰めた。書店で買ったのは「旧新約聖書」。依田の薦めたのは「文語訳」だが、あまりに難しそうなので、とりあえず「口語訳」にした。始めの「創世記」から読み始めるが、なかなか意味がつかめない。第二章のいわゆる「エデン園」についての記述に目がとまった。

また一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分れて四つの川となった。その第一の名はピソンといい、……第二の川の名はギホンといい、……第三の川の名はヒデケルといい、……第四の川はユフラテである。

(創世記 第2章 10節から 14節 口語訳)

エデンに源を発する四つの川の名前が気になった。「ユフラテ」とはあのユーフラテス川のことかな。四つ
の名前を暗記することにした。

「ピソン、ギホン、ヒデケル、ユフラテ」

何度も口に出して覚える。特に節をつけているわけではないが、呪文のように覚えてしまった。杉本の得意技だ。

ちなみに、杉本が飼っているインコの正式な名前は「クレイジー・クッキー・クッカー・クロス・ワカ・ぴっぴ・ナルシス・しあわせ」だ。家族の中でこの名前を早口で間違えずに言えるのは杉本だけである。

第5章 再び コーヒーハウス

5 再び 北浦和コーヒーハウス

探していた建物は、国道をひとつ西側に入った道路に面して立っていた。二階建ての英国風の建物だ。大きなポットをかたどった鉄製の飾り看板が目立っている。二階にある二つの大きな出窓とその上にある二つの小さな明かり取りの窓が、昔風の雰囲気を出している。今までどうしてこの建物に気が付かなかったんだろう、と杉本は思った。

道路を挟んで向かい側には北浦和公園があり、今はまだ緑も少ないが、この辺りにしては良い環境のようだ。建物の一階は駐車場になっている。建物の両脇にはパンジーが植えられた小さな花壇が一つずつ作られている。二階に上る階段の昇り口の壁に四角いプレートが張られていた。そこにも、杉本が持っているカードと、ほとんど同じ文字が並んでいる。プレートの色はコーヒー色だ。腕時計を見ると二時十分前だった。自転車置き場らしいところに自転車を置いた。

ほんとに喫茶店と間違えられないかな、この階段では車椅子では上れないな、などと考えながら、少し暗くなっている階段をゆっくりと上る。踊り場の上のほうにある古くなった蛍光灯がチカッ、チカッと点滅している。めずらしく緊張してきた。どんなことになるのだろう……。

階段を上りきったところに、娘と同じくらいの年齢の女の子と、母親らしい女性が立っていた。二人とも満面の笑顔だ。こういうのをビッグ・スマイルというのだろう。

「ようこそいらっしゃいました。はじめまして。斉藤といいます」

はじめに声をかけてきたのは娘のほうだ。二本のおさげ髪に赤いリボンをつけている。食い入るような目でみつめてくる。

「どうも。杉本といいます。よろしくお願いします」

杉本は少しうろたえながら答えた。

「こんにちは。私も斉藤です。お会いできて嬉しいです。どうぞ、どうぞ」

本当に嬉しそうな母娘の、よく似た笑顔に促されて、開かれている大きなドアをくぐりぬける。すぐ左側にライオンの頭をかたどったポストのようなものが置かれていた。

部屋はひとつの大きな広間のようにになっている。床はしっかりとした木製で、土足のままで入れる。吹きぬけの天井が高い。広間のほぼ中央に大きな古い薪ストーブが置かれていた。冬の間はさぞ暖かいだろうと思わせた。煙突は太い梁にそって右横に伸びて、広間の西側に並んだ二つの明かり取りの窓の間から表に突き出している。

大きな木製のテーブルが正面に一つと左右に二つずつ置かれている。梁からつり下げられた観葉植物があちらこちらに配置しており、空中庭園のようだ。大きな観葉植物も床の上にたくさん置かれていて、適度

な目隠しの役目をしているようだ。見たところ三十人ほどの男女子供が、あちらこちらで、何か良いことでもあったかのように会話している。

ゆっくりと見回す暇もなく、一人の男が近づいてきた。

「あれあれ、ワトソンさんじゃないですか」

それは去年の暮れに、病院の隣のベッドにいた、時代小説好きの男だった。

「あれっ。えーと、加藤さんですよ」と杉本は、そり上げた頭を見ながら男の名前を思い出して呼んだ。

知らない人ばかりのところでは知り合いに会うとホッとすることがあるが、病院で親しく話しあったことのある加藤の登場に、杉本の緊張は少し解けてきた。

「でも、どうしてここにいますか」と、当然の質問を杉本は発した。

「いや。家が近くなんでね。あのあと依田さんに頂いたカードで、この場所に来てみたのですよ。そしたらなんか面白くて、最近は毎週通っています」

「なんだ、そうですか。先を越されたということですね」

十ほども年齢の上の加藤に、杉本は同好のよしみを感じたように親しく話した。

「ようこそ、杉本さん」と、片目に眼帯をした男が話しかけてきた。よく見るとあの松葉杖の男、依田純一であった。

「あ、依田さん。久しぶりです。どうしたんですか、その目は」と、また当然の質問を発する。

「物もらいになってしまいました」と依田は頭をかいた。相変わらず髪の毛は、くせっ毛のようで、少し薄くなっているが、くしゃくしゃだ。背広を着込み、ネクタイをしていたが、服のサイズが少し大きすぎるような感じがする。

依田純一と一緒に近づいてきた、きれいな白髪の方が面白そうに口をはさむ。

「依田兄弟は病気や怪我の専門家なんですよ、ははは」

その時、正面のテーブルの脇に立った、背の高い若い男が集会の始まりを告げた。

「み、皆さん、じ、時間ですので、お、お集まりください」

緊張しているのか少し口ごもっている。

人々はいっせいに近くの椅子を持ってきて、正面の大きなテーブルを囲むように、思い思いの場所に腰をおろした。「どうぞ」と満面の笑顔の、母の斎藤さんが杉本に椅子をすすめた。

「ああ、どうも」杉本は言われるままに腰をおろした。

「で、では、はじめに、四十二番の歌を、歌いましょう」と若い男が述べるのと同時に、杉本の後ろに座った、娘の斎藤さんが、どうぞ、と薄い本を手渡してきた。これが賛美歌というものかと、杉本はページを開いた。

正面の大きなテーブルの右側に置かれたピアノで、若い女性が伴奏を始める。皆は声を出して歌い始めたが、杉本には初耳の曲だ。それでもなんとか歌詞を読んで歌おうと努力してみた。和歌子なら楽譜も読めるし、すぐに歌えるようになるだろうけどな、と思った。

歌が終わると背高男は祈りを始めたようだ。皆、頭をたれて聞いているが、すぐに「アーメン」と声を出した。祈りが終わったようだ。タイミングを見計らっていたらしい子供たちの元気な「アーメン」が響いた。杉本は、一呼吸遅れて、かろうじて口の中で「メン」と言えたが、誰も聞き取れた者はいないだろう。

若い男が話し手を紹介し、白髪の男が代わって話を始めた。先ほど依田の隣にいた面白がり屋の男だ。話の中で聖書の章句が引用されると、後ろの、娘の斎藤さんが、どうぞと聖書を差し出してきた。あ、どうも、と受け取って、皆のまねをして指定された場所を開くふりをした。口語訳聖書だった。

『そうか、自分のを持ってくればよかったな』と、手ぶらで口笛を吹きながら自転車を走らせてきた自分を責めた。

すぐ前の椅子に座っている三歳くらいの女の子が後ろを振り向いて、杉本の顔をじっと見つめている。その隣の母親らしい女性が、小声で「レナ！」と叱って前を向かせる。女の子はしばらくしてまた杉本を見たので、思い切り大きな笑顔を作って見つめてあげた。すると今度は驚いて自分から前を向いてしまった。しばらくして、また後ろを向いてきたので、声は出さずに「レナちゃん」と大きな口で呼びかける。赤いほっぺのレナちゃんは今度はニターっと笑った。母親もつられて微笑んで、後ろの杉本にお辞儀をした。

話の内容はよく分からなかったもので、杉本は改めて集会場の様子を眺めてみた。四十人くらいの出席者があるようだった。正面のテーブルの前には年配のお婆ちゃんたちが数人座っている。女性が多いように思えたが、年配の男性も数人いる。若い母親と小さな子供達も目立っていた。十代らしい男女も数人いるようだ。時折、泣き声を上げる子供を母親が外に連れ出して泣き止ませていた。

左側の前のほうでよく見えなかったが、聴衆に向かい合う形で座った女性が手を不自然に動かしていた。あっ、手話通訳だな、ろう者もいるのだなと思った。

広間の左側の壁はずっと長い本棚になっていて、本や図鑑がたくさん並べられている。世界児童文学全集のようなものも置いてある。ちょっとした図書館のようだ。

右側の出窓から見える北浦和公園の古い小山や池をぼんやりと眺めていると、話は三十分ほどで終わり、続いて質疑応答が始まったようだ。熱心な質問が話し手に対して投げかけられ、話し手もまた熱心に答えている。杉本にはちんぷんかんぷんな内容だ。

再び賛美歌が歌われ、「基礎研究」が始まった。杉本の期待どおりに、後ろから母の斎藤さんが、どうぞとパンフレットを手渡してきた。

眼帯の男、依田純一が前に立った。少し声が小さいので、皆は聞き耳を立てるようになる。先ほどの、緊張して司会をしていた若い男とは別の、落ち着いた若い男が前に立って、パンフレットの一節を朗読すると、依田は考え深い表情をして質問をする。挙手をして指名された人々の答えに、いちいち大きくうなずいている。三歳くらいの子供でさえ、一言の答えを述べている。杉本もなんとか答えられないかとパンフレットに目を通したが、ちょっと歯が立たない。少し悔しい思いがしたが、初めてなんだから仕方ないとあきらめた。

「基礎研究」も三十分ほどで終わった。最後に再び賛美歌を歌い、終わりの祈りがささげられた。待ち構えていた杉本は「アーメン」とちゃんと言えた。少しタイミングが遅れたが。

集会が終わると、次々に人々が杉本に近づいてきた。皆、笑顔で、「あのワトソンさんですね。ようこそいらっしゃいました」と声をかけてくる。依田が病院での出来事を広めていたようだった。杉本も、調子を合わせて、声をかけてきた三人目くらいからは、自分のほうから「どうも、ワトソンといいます」と自己紹介をして、純朴な人々の笑いを誘っていた。

急にコーヒーの良い香りが漂ってきた。

眼帯の男、依田純一が、杉本の肩に手を置いて、「少しお茶でも飲んでいきませんか」と声をかけてきた。杉本のほうが、だいぶ背が高いので、見下ろすような格好になる。

先ほどの、面白がり屋で、始めに演壇で講義をしていた白髪男も、「いやあ、下手な話よりこの時間のほうがいいですよ」と人なつこそうな表情を浮かべている。ひょうきんな人のようだ。名前は先ほど紹介されたが、まだ覚えていない。

後ろのほうにある大きくて長い二つのテーブルに何人かが思い思いに座り、日本茶や紅茶やコーヒーを飲みながら会話をしていた。セルフサービスで、作り付けのカウンターから飲み物を運んでくるようだ。クッキーも少し置いてある。

本当にコーヒーハウスになった。

「コーヒーは飲みますか」と、ひょうきんな男の隣に座った、中年の女性が尋ねた。奥さんらしかった。砂糖とミルクをいっぱい入れた紅茶をリクエストする余裕は、まだなかったので、「はい。頂きます」と素直に答える。改めて自己紹介をしあって、夫婦の名前が森田ということを知った。

「そういえばあの入口のところにライオンにはどんな意味があるのですか」と気にかかっていたことを杉本は尋ねてみた。

「ああ、あれは投書箱ですよ。聖書についての質問や疑問がある人が自由に投書できるようになっています。講義をする人たちがこれを参考にして内容に含めたりしています。時には、コーヒー豆はキリマンジャロにしてくれ、なんていうものもありますけどね。ははは」と森田は愉快そうに話した。

「どうしてライオンなんですか」と杉本。

こんどは森田の妻が説明をした。

「昔の英国のロンドンにあったコーヒーハウスの一つに同じようなものが置いてあったそうなのです。それでライオンには大した意味はないのですが、私たちの集会所には必ずおいてあるのですよ。でもそれぞれの場所によって手作りなので、いろんなライオンちゃんがありますよ。ジャングル大帝レオみたいなものもありますし、子供が工作で作ったものを使っているところもあります。かわいいですよ。おほほ」

何人かが同じテーブルに座ってきて、ひとしきり自己紹介が続いた。杉本が書店で聖書を買って読み始めていることを告げると、皆大げさに驚いた。「そんな人は珍しい」ということらしい。

杉本はふと思いついて、

「『エデンの園』から流れている四つの川の名前を覚えました」と言ってみた。

皆は「え、何でしたっけ。ユフラテとかですよね」といって顔を見合わせた。

杉本は覚えた呪文を唱えた。

「ピション、ギホン、ヒデケル、ユフラテ！」

皆は、「すごい」と声を上げた。近くにいた双子らしい小さな男の子たちが「すごい」と同時に真似をした。色違いだがおそろいの蝶ネクタイをして、ズボンつりのついた半ズボンを着ている。

隣に座った依田純一は、眼帯に隠されていないほうの目を見開いたかと思うと、すぐに細めて、あははははと大声で笑った。また、この素朴な男のつぼにはまってしまったらしかった。

第6章 天の父と子

6 天の父と子

物語の時は、始めの、変わり者娘たちの長野県温泉めぐりの夏休みに、ようやく戻ってきた。

八月の初め、埼玉でも暑い夏が続いていた。杉本の家の中に植えられた数本の大きなひまわりが重そうな首をたれていた。

土曜日の今日は、会社は休みの日だったが朝寝坊をすることはできない。毎朝、柴犬のテリーを散歩に連れて行く日課があるからだ。動物好きな杉本はこの散歩が嫌いではない。毎日、大体決まったコースを歩き、開けた野原に来ると、テリーの首輪から散歩用の綱をはずして自由に駆け回らせてあげる。ゆっくりできるときは、三十分くらいはそのまま放しておく。その間、杉本は興がのると童謡やら映画音楽やらフォークソングやらを人目もはばかりなく、いや、人目ははばかりながら声の調節をして歌った。何か気に掛かることがあるときは、そのことをじっくり考える。

そんな時は、犬のほうも杉本の様子を時々うかがい、まだあちこちをかぎまわることができるかどうか確認する。気が付くとつぶらな瞳を向けた柴犬テリーが、忠犬ビクターみたいに杉本を見つめて「ねえ、帰ろうよ」とじっと待っている、ということもある。

今朝の杉本は、この数ヶ月に依田純一とともに学んだ聖書の教えについて考えていた。

依田は毎週水曜日の夜八時に杉本の家に来てきた。ちょうど一時間くらい「ホーム・スタディ」が続き、終わると妻の和歌子が紅茶を入れ、短い雑談をして帰っていく。それ以上長居をすることはなかった。依田と一緒に学ぶ時のテキストは「見なさい。新しい天と新しい地を」という主題のパンフレットだ。それほど厚いものではないので、もうすぐ終わってしまうだろう。依田と杉本は、たいてい、このパンフレットを一回に五節ほど進む。書かれていることの裏づけとなる聖書の場所をたくさん開いて読む。他にも関連する資料を依田はたくさん準備していて引用してくる。杉本が繰り出す突拍子もない質問にも、苦もなく答え、面白い例えや経験談を用いながら説明した。いつも強調することは、毎日聖書を少しずつ読むことと、毎日いつでも神に祈ることの大切さだ。

神の存在が、どうしても信じられない、と言う杉本に、依田は、サブリーダーとして二冊のパンフレットを読むことを勧めた。「マインド・コントロールとしての進化論」と「すべての答えは創世記の始めの三章にある」だ。

これらのパンフレットの説明は杉本にとって筋が通っていると思えた。

たった一つの小さな細胞の生物でさえ、人間の理解を超える複雑さを持っている。何億年も時間さえかければ、いつかは自然に、生きた細胞が発生するとする進化論は、良く考えてみれば能天気な教えだ。進化論は初めの一步で、もうつまづいている。

「原始の還元的な大気」だの「有機物のスープ」だのという裏づけのない言葉に騙されてはいけない。仮に、ありえない確率の壁を通り抜けて、複雑なDNAをもつ、たった一つの細胞が動き始めたとしても、次の段

階へどうやって進むのだ。

「突然変異」という進化の推進力は、遺伝子上の事故に過ぎない。誰かが考えて、都合の良いように起こすものではない。自己を複製する、二つの生きた細胞を持つ生物への道は険しい。ましてや、どうやって八十兆個もの細胞からなる人体という組織体にどうやってたどり着くのだ。宇宙でもっとも複雑なものといわれる、一千億もの細胞からなる人間の脳に、どんな偶然が重なってたどり着くのだ。宇宙だって貪欲に理解しようとする頭脳と、愛する者のために命を捨てる心を持った人間を、どうやって生み出すのだ。

まあいい、本当にそんな「偶然」の神が、すごい知恵を働かせて、進化を起こさせたとしよう。私たちの周りには進化の証拠が歴然と残っているべきではないか。無数の中間形態の生き物が生きているはずではないか。

ほらね、キリンの首は、始めは短かったのだけど、こんな風に順々に長くなったのさと、生きたキリンたちが動物園に展示されていないのはなぜか。

キリンの首が長くなったので、遠くなった頭の中の脳みそに血液を届ける首の血液が逆流しないように、進化の神が、強い心臓を与え、血管の内壁には逆流防止弁をたくさん作ったのさ。すごいだろう。中間の首の長さのキリンは皆、高いところの草が食べられずに死んでしまったのさ。ではあの羊は、ヤギはどうやって生き残ったの？

イルカや鯨の祖先は苦勞して海から上ってきて狼のような体になったのだけど、理由（わけ）あってまた海に戻ってあんなにすべすべした流線型の体にしたのさ、すごいだろう。進化の神秘だ。

夢見るトカゲがね、空を飛びたいと思ったのさ。そしたら「偶然」の神様が素敵な翼をくれたのさ。うろこのような皮膚がだんだんと、といっても何十万年もかかったのだけど、見事な作りの翼になり、それをはためかせる強靱な筋肉もくれたのさ。おまけとして地球の磁気を感じる磁石もくれたので、何万キロも渡って遠くの繁殖地に正確にたどり着くことができるのさ。ね、進化はすごいだろう？

「有史」と呼ばれる、人間が生きた痕跡の残る期間は、わずか六千年しか遡れないのはどうしてだろう。

チンパンジーが生きていて、それより進化したはずの原始人が今はどこにもいないのはなぜだろう。

何十万年とか何百万年と大雑把に言われるけど、そんな短い期間の中で、ゼロが、少数点の下に百も二百も続く、ありえない確率の奇跡が、ありえない回数も連続して起きるのはなぜだろう。

進化論の強いマインド・コントロールにかかって、考える力を失っているだけなのに、「大進化」だ「小進化」だ「断絶平衡」だと、したり顔で言うのは止めてください。

ダーウィンさんだって、人間の眼が、どうやってオートフォーカスのカメラのようにレンズと網膜が働くようになったのか、『今はお答えできません』って国会答弁みたいなこと言ってるんだ。科学者の皆さんが答えられないのもしょうがないよ。責めてはかわいそう。彼らだって信じたいのさ。「偶然」という名の神様をね。それはそれでしょうがない。信教の自由だ。それは認めてあげるから、僕らの自由も認めてください。この宇宙には意味が満ちていると信じる自由を与えてください。人生に意味なんてないと言わないで下さい。馬鹿にしないでください。きっと、僕らの説明のほうはずっと筋が通っていて「科学的」さ。

だから、お願いだから、つまらない嘘をでっち上げて、原始人の化石だ、といって騙（だま）すのは止め

て！ 何の根拠もないのに、毛むくじらの原始人の想像図を作り上げて、みんなの目をくらますのは止めて。フェアな勝負をしましょうよ。

杉本は犬の散歩中であることを忘れて考え続けていた。テリーはこれ幸いと、はるか遠くまで出張している。

夏草の強い香りが立ち込めていた。

前回の依田純一との勉強の時に、杉本は漠然とした「悩み」を打ち明けた。

「あの……、神様が確かにいるなあとは思いはじめてきました。でも、まだまだ、実感できないというか、神様って手を合わせる気持ちにはなれないのです。宗教心があまりないのです。私は本当に神様を信じる人になれるのでしょうか」

依田は答えた。

「杉本さんは正直な人ですね。すばらしい。……私は猫がとても好きでしてね。今までたくさん飼ってきました。猫にも色々な性格があることに気づきました。とても人懐っこくて、いつでも体を擦り付けてくる猫もいれば、あまり懐こうとしない猫もいます。二十年ほど前に飼った猫が、そんな、すぐには懐いてこない猫だったのです。ジュンという名前でした。」

依田は懐かしく思い出す表情になった。

「ジュンはペルシャとシャムの雑種でした。毛の色は縞模様が入った青みがかかった灰色で、眼は綺麗な空色でした。もらってきた時から、ぼおとした猫でした。それに、ひざの上に乗せると嫌がってすぐに降りてしまうのです。私を嫌うわけではないのですが、あまり近寄っては来ないのです。」

でも冬の寒い時に、何度もひざに乗せてあげるようにしていると、始めはすぐに降りてしまったのですが、やさしく押さえているうちに慣れてきて、短い時間ならひざの上にいるようになりました。やがて自分から私のひざに上ることもありました。でもね。頭は私のほうに決して向けません。お尻と長いしっぽを私のほうに向けて、頭は私の膝頭に乗っけて、まっすぐに、長くなって眠るのです。

私はそんなジュンが可愛くてね。一緒に四つんばいになって部屋の中を歩き回ったりしました。でもジュンは相変わらず無愛想で名前を呼んでも知らん顔をしていますし、一度、どこにもいなくなって必死に名前を呼んで探し回っていたのに見つからなくて、どうしようと思いつつ、ふと家の屋根を見たら、ジュンは、どこから上ったのか屋根の上にじっと座って、空色の眼でこちらの騒ぎの一部始終を見ていたのです。

私はほっと安心しましたが、ジュンは私の気持ちなどまるで分からないように無然としているきりでした。でもね。ジュンはやがて私のほうに頭を向けて安心して眠るようになりました。そして、ジュンも年をとって足腰がずいぶん弱くなってしまいました。病気になってやせ細ってしまったのです。ジュンはいつも私の姿をさがすようになり、見つけると、よたよたと近づいてきました。ある晩ジュンは動けなくなり、私のベッドの上で死にました。自分からベッドによじ登ってきたのです。私は悲しくて悲しくて、たくさん泣きました。でもね。ジュンは最後は私の手の中で死んだのです。

依田純一は感極まって自分の二つの目を片手で覆った。

「私の言いたいことが分かりますか」

杉本も目頭が熱くなって静かにうなずいた。

依田はなお続ける。

「そう、神は、きっと私たち人間のさまざまな性格を理解した上で可愛いと思ってくださっていると思うのです。なかなか懐いてこない人だって、きっと分かってくださっていると思うのです。実はね、杉本さん……私もジュンと同じなんです……」

依田は悲しい目をして少し黙った。

「私の心もなかなか神へと向かない心だったのです。でもね。何年もの間、悩み続けていると、神と一番親しくて愛されているイエスに改めて思い至ったのです。そうか、イエスのようになればいいのだと、いまさらながらに思ったのです。なんとも遅い悟りでした。改めて新約聖書を読み直してみると、まずはマタイ3章17節に目がとまりました。ここの所です」

依田は自分の聖書を開き、指差した。

天から声があって言った、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」。

(マタイ伝 3章 17節 口語訳)

「イエスがヨルダン川でバプテスマを受けた時、天の父は思わず声を出し、これは私の子です、私の愛する息子ですといわれたのです。この聖句は私の宝物となりました。続いてイエスが神のことを父と呼んでいるところを探して丸で囲んでみました。そんな風にして読み直してみると、イエスが涙して天の父に祈っている所や、最後に『父よ、私の霊を、あなたのみ手に委（ゆだ）ねます』といわれて亡くなる時のことがそれまで以上に私の胸に迫ってきました。そして、イエスのように生きればよいのだと悟りました。私はこうしてイエスにたどり着いた時に、初めて自分も天の父に近づくことができると心の底から思えるようになりました。だから私はイエスのようになりたい、イエスようになって天の父に愛されたい、といつも考えて生きているのです」

杉本は依田純一の言葉の意味を本当に理解したわけではなかったが、

『自分も死ぬまでには神様をずっと身近に感じられるようになれるかもしれないな、はるかな旅路かもね』と考えると大きく深呼吸をした。

ふと気が付くと柴犬のテリーが小さな丸い目でじっとこちらを見ている。杉本は思わずテリーを抱きしめて、「テリー、長生きしろよ。おじいちゃんになってから死ねよ」とつぶやいた。

草の上を、バッタがあちこちで、チチチと音を立てて飛びまわっていた。

杉本の目の端にも小さな黒い影が走った。振り返ってその姿を探したがどこにもいなかった。

7 お金の話

サモア諸島の一つの村に、たいへん賢い一人の※酋長がいた。その酋長は、ヨーロッパ人のキリスト教の宣教師が島を訪れてキリストの教えと「お金」をもたらした時に、二つのことを見抜いた。一つは、彼らの教える神様とは自分たちの信じている「大いなる心」のことだということ。もう一つは、ヨーロッパ人は「大いなる心」を本当は信じてはおらず、彼らの神は「ぴかぴか光る丸い金属と重たい紙」つまり「お金」であるということだ。彼らは、一日にどれくらいのお金を集めることができるのか、とか、鉄の箱にどれくらいお金をしまっているのか、によって人の価値を計るのだ。

※『パパラギ』より。この酋長は架空の人らしい。

さて、日本国の埼玉県の新井家の家に、話を戻そう。

九月の初めになり、やっと涼しい日が多くなってきた。いつの間にか伸びてきたコスモスが気の早い花をいくつか咲かせている。

学校も始まり、朝の新井家は忙しい。七時には夫と高校生の長女が仲良く出かける。正確に言うと、娘の後を夫が追いかけるように出てゆく。同じバスに乗り、同じ北浦和駅まで行くためだ。少し遅れて中学生の息子はせかせかと自転車で、小学生の息子はふらふらと徒歩で出かけていく。インコのクッキー・クッキーは幸せそうな顔をして、首を揺らしている。

一人残った和歌子は、朝の「シルバー・タイム」つまり、『銀の時』を楽しむ。お昼には「ブロンズ・タイム（銅の時）」がやってきて、夜には「ゴールド・タイム（金の時）」が待っている。

朝ご飯の後片付けと部屋の掃除を急いで終わらせると、八時十五分から、いつもの朝の連続ドラマを見ながら、その日の気分に合わせて、紅茶やハーブティーを入れる。ドラマはきっかり十五分で終わるので、八時三十分から九時までが「シルバー・タイム」だ。たいてい和歌子は、自分の好みに合う衣服やインテリアや雑貨について書かれている雑誌やエッセイを開き、お気に入りの窓際の場所に腰掛け、ゆっくりと飲み物を口に運び、ほほ笑む。

九時になる。和歌子はお気に入りのゆったりとした部屋着から、しま模様の入ったブラウスと紺色のベスト、そして同じ紺色のぴっちりとしたスカートへと着替える。そして、しっかりと戸じまりをして、自転車にまたがり、急いで五分ほど走る。

「おはようございます」

「おはよう」

元気なあいさつの声が飛びかい、「さいたまフード」の営業が始まるのだ。

地域の中程度の規模の、このスーパーマーケットは、接客対応がしっかりとしている。社長の男が、もっ

と大きな規模のチェーン店の研修会に参加して以来、朝のミーティングに歌を歌うことが取り入れられた。今日は「森のくまさん」だ。『ある一日。森のな一か……』と、大きな声を出して歌い、挨拶の発声練習とお辞儀の練習が終わると、簡単な申し送りや注意事項が告げられてミーティングは終わる。後はそれぞれの担当場所に向かう。和歌子は「レジ係」だ。本当は「接客係」になって衣類や雑貨を扱いたかったのだが、仕方がない。「レジ」担当になったおかげでお金の計算が速くなったのは確かだ。

「ブロンズ・タイム」は昼の休憩時間に急いで自宅に帰って過ごす一時間弱の時間だ。この時間帯は「レジ係」のローテーションによって週ごとに異なる。

夕方の終業時に従業員の控え室はにぎやかだ。

従業員の一人の、近所に住む優しい顔の主婦が和歌子に近づいてきた。和歌子もこの人は嫌いではない。心配そうな表情をしていた。

「ねえ、和歌子さんのご主人は、駅前の『コーヒー・ホーム』に行ってるのよね。ちょっと良くないうわさを聞いたの。お話ししなくちゃと思ったのよ。あそこの人たちは、お給料の十分の一を寄付する必要があるらしいのよ。たいへんよね。十分の一も取られたら生活ができなくなるわ。それにね。何か悪いことをするとすぐ首になるっていうのかな、誰も挨拶もしてくれなくなるんですって。でもね。幹部にお金を払うと元に戻れるのだけど、そのお金の相場が、軽い罪で三十万円、重いと百万円にもなるんですって」

その日、和歌子は心配になった。もともとのんきな性格なので、あまり物事を心配しないたちなのだが、今回は何か胸騒ぎがした。ローンがだいぶ残っているマイホームを失いたくなかった。

次の日、和歌子の家に、依田純一がやってきた。いつもより勉強の時間が長引いていた。応接セットに座っている二人は、とても真剣な顔をして話し合っていた。和歌子はまた、胸騒ぎがしてきた。

やっと勉強が終わって、和歌子はいつものように紅茶を入れた。そして、ころあいを見て、気がかりな質問をした。

「あの、依田さんは毎週来て下さいますけど、何かお礼というか、感謝の気持ちを表したいのですが、どうしたら良いでしょうか」

依田は困ったような表情を浮かべて答えた。

「あ、いつも出してくださる、おいしい紅茶で十分ですので気を使わないで下さい」

杉本がのんきに口を挟んだ。

「ああ、そうだよ。何かお礼をしなくちゃね。何がいいかな。そうだ、冬になったら伝道の時とかに手袋を使うでしょ。そうだな。依田さん、たまには明るいオレンジ色の手袋なんてどうですか、ははは」

依田は和歌子の気持ちを察したように話し始めた。

「イエス・キリストは弟子たちにこんな風に命令したことがありました」

ただで受けたのだから、ただで与えるがよい (マタイ伝第 10 章 8 節 口語訳)

「使徒パウロという人はこのように言っています」

また、あなたがたの所にいた時に、「働こうとしない者は、食べることもしてはならない」と命じておいた。……静かに働いて自分で得たパンを食べるように、主イエス・キリストによって命じまた薦める (テサロニケ第二 第3章 10節、12節 口語訳)

依田純一は続ける。

「以前に私自身も、ある兄弟から『ただで』教えて頂きました。私もイエスの命令に従ってそうする務めがあります。私たちのグループでは、金銭的な報酬をもらって活動する人は一人もいないのです。皆、自分の必要な物は自分で賄って生活する必要があります。

一般のキリスト教会では、有給の僧職者がいることが普通ですが、私たちの場合はそのようなことはありません。『センター・ハウス』と呼ばれる、主に印刷業務をするところで住み込みで働いている人たちもいますが、食事と宿舎が皆に与えられ、他には交通費と、身の回りを整えるための、月額で数千円という小額の手当てを受け取るだけなのです

集会場所の隅に寄付箱が置いてありますが、私たちは自発的に寄付をします。集会場を運営するために家賃や電気や水道代が掛かりますからね。恥ずかしい話ですが、私は本当にわずかな寄付しかできません。ほとんど寄付ができない状況の兄弟姉妹もたくさんおられますよ。でもね。神はお金ではなくて、人の心に興味を持っておられるのですね。」

続けて依田は聖書を引用し、昔、エルサレムの神殿で、これ見よがしに多くの寄付をしている人々よりも、わずか十円くらいの価値の硬貨二つをひそかに寄付した年配のやもめの女性のほうに神は注目しておられる、とイエスが弟子に諭すくだりを説明した。

「イエスは『山上の垂訓』でも『隠れたことを見ておられるあなたの父』という言葉は何度も使って、神は人の心の中にあるものを評価していると弟子たちに強調しました。でもね。これはある意味では覚悟が必要なことですね。神の目からは逃げも隠れもできないのですから。……さあ、すみません。遅くなってしまいましたね。今日はこれでおいとまします。」

依田が帰った後、和歌子は夫に言った。

「手袋の色は、オレンジは合わないわよ。私が良いのを見つけてくるから任せてね。依田さんには薄茶色が合うんじゃないかな。手は小さそうね」

和歌子は手袋の載っているカタログを探し始めた。「ゴールド・タイム」(金の時)が始まった。

熱帯魚の水槽の中では皆にいじめられている一匹の小さなグッピーを、エンゼルフィッシュが守っているように見えた。

8 小人

十月に入って秋らしい晴れた日が続いていた。

この季節になると杉本は子供の頃住んでいた家にあった柿の木のことを思い出す。その木は太くて登りやすい木だった。家で飼っていたくろという名の猫のお気に入りの場所はこの木の太い枝の上だった。幼い子どもの杉本は、猫の名前をくろと言えずに、クーと呼んでいたそう。くろの登り方はとても素早い。つめを木につきたてて一気にバリバリバリと駆け上がってしまう。そのくせ登ってからはまことにのんびりして枝に横たわっている。

くろをうらやましがった子供の杉本は、その木に慎重に登ってみた。柿の木の枝は折れやすいから気をつけなさいと、夫を早いうちになくした心配性の母親に何度も言われていたので、始めはおっかなびっくりと登った。しかし木は思いのほか丈夫だったので、そのうちにすっかり慣れてきた。くろほどには素早くは登れなかったが。

くろが好んで横たわる横枝より少し低い、幹のあたりに、子供の杉本が腰をかけて背中をもたれさせられる場所があった。この場所は晴れた日の、お気に入りの場所となった。たいていは読みかけの本を持って登って読んだ。ダルタニヤンの活躍も地底世界の探検も、皆この木の上で時間を忘れて没頭した。秋には、手の届くところに食料もたくさんあった。もう少し、もう少しと粘って読んでいるうちにほとんど真っ暗な夜になっていることもあった。子供の頃は不思議な「サーチライトの目」を持っていたのかも知れない。

そんな十月のある夜、杉本の家にはいつものように依田純一が訪れていた。和歌子が紅茶を出す時間になるころ、長女の美香が二階から降りてきて依田に挨拶をした。

「こんばんは」

「あ、美香ちゃん、こんばんは」と依田は機嫌よく答える。

「あの、聞きたいことがあるんですけど」美香が尋ねる。

「はい。分かることなら何なりと、お答えします」と依田。

「聖書には小人（こびと）って出てきますか。身長が三センチくらいなんですけど」

「えっ、身長三センチの小人ですか……」

久しぶりに依田をあわてさせる質問のようだ。

杉本も和歌子も、答えを待った。

「ええ……」と言いながら依田の目は宙を泳いだ。頭の中では、ものすごいスピードで聖書のページが「創世記」から「黙示録」まで、六十六の書が順に開かれているのが分かった。途中で二、三度止まりかけたが、結局最後まで行ってしまったようだ。

「ふー」と息を吐いてから依田は答えた。

「私が知る限りでは聖書の中には神様がそんなに小さな人間を作ったという記述はないようですが、作らなかったという記述もないようですね。美香ちゃんは小人に会ったことがあるのですか」

「えっ、じゃあ、やっぱりいるかも知れないってことですね」と喜びの声を上げた美香は事情を説明した。「小人たちと友達になった男の人が主人公のお話を読んだんですけど、なんていうか、本当のここのように思えるんです。小人たちの味方になれる良い人間でないと友達になれないんです。友達になった人には小さな、かわいい鏡とか短剣をくれるんです。私も友達になれたらいいなと思っていつも探しているんですけど、まだ姿を現してくれないんです。きっと私が本気かどうか試しているんじゃないかな。もしかしたらこの近所にも小人が住んでいる小山があるかも知れないと思って、あちこち見ているんですけど。この辺にはないのかも知れません。そしたら、こないだ沖縄旅行をしたいなって思って沖縄の地図を見ていたら、気が付いちゃったんです」

美香は手に握っていた地図を開き、興奮して指差した。

「ここです」

その山は、沖縄本島の南部にある知念半島にあった。知念村と佐敷町の境のあたりだ。

『須久名山（すくなやま）』

「この名前は本に出てくる小人たちの先祖の『スクナヒコ』と同じなんですよ。古代史でも勉強したんですけど日本の神様にも『スクナヒコナノミコト』という人がいるんです。それにほら近くにある『久高島』は神の島って呼ばれているんです。偶然の一致とは思えないんです。でも良く見ると『スクナ山』の周りはゴルフ場になっているので、小人たちには環境が悪くなって別のところへ引っ越してしまったのかも知れないけど……。あと、それに沖縄にはキジムナーっていう名前の小人伝説があるんです。大人には見ることのできない小人で、伝説では大きさも数センチから小さな子供くらいまでまちまちなんです。偶然の一致じゃないわよね」

美香は、最後は自分自身に問いかけた。頭の中に、ガジュマルの木の影から自分をそっと見ている、いたずら好きなキジムナーの姿が浮かんだ。

依田は優しく声をかけた。

「沖縄に行ったら確かめてみるといいですね」

美香は元気に答えた。

「はい。そうします。わあ、芳子に電話して話さなくちゃ。依田さん、ありがとうございました」

高校二年生の美香は、二階の自分の部屋へ駆け上がっていった。

いつの間にか来ていた小学四年生の悟がテーブルの上のクッキーを食べていた。

杉本もクッキーを口に運んだ。

クッキー・クッカーは「おーいミズシ、マ」と遠慮がちに言った。

和歌子は、もう一杯いかが、と依田と夫に勧めた。

依田は、いただきますと答えてから、悟に尋ねた。

「悟君は身長が三センチの小人はいると思いますか」

悟は指で大体三センチの大きさを作って

「ああ、コロボックルのことでしょ。ヒコと友達になったよ……あっ、誰にも言ってはいけないんだっ」と言ってから、あわてて、お兄ちゃんと一緒に自分の部屋に逃げていった。

9 家族の一致

十一月になると急に寒い日が続いた。杉本の家庭に植えてある楓の木も黄色と紅色の葉を付け始めた。子どもたちの大好きな遊び場になっている、近所の「与野公園」にはクヌギの木がたくさんある。春にはカブトムシやクワガタがたくさん集まる木々だが、今は枯葉色に姿を変えている。幹の周りには落ち葉に混じって、たくさんどんぐりが丸い顔を並べている。一本の巨木が生み出す「子供達」つまりどんぐりの数は五万個にもなることがあるという。こうした自然の不思議を、「大いなる心」創造主の手のわざとするのは間違いなのだろうか……。木の葉がさわさわと音をたてて揺れていた。

日曜日のお昼は、今日もスパゲッティだ。十一時半になると和歌子は昼食の準備を始めた。今日は野菜をたっぷり炒めて具を作る。お湯がステンレスの鍋にたっぷり沸いたころ、夫に声をかける。杉本は、お湯にスプーンで塩を少し入れ、乾燥した麺を半分に折ってから入れる。これは杉本家のやり方だ。テレビのニュースを横目で見ながら、時々麺の固さを確かめる。何度も試し食いをしながら理想の硬さを目指す。今だ、という時にキッチンのシンクに置いたステンレス製の大きなざるに、茹った麺を流し込み、お湯を切ってから、家族の人数分のお皿にトングを使って盛り分ける。そして和歌子が作っておいた具を均等に盛り付けて出来上がりだ。あっ、バターも欠かせない。このときの時間は十二時十五分になるのが理想だ。テレビで「のど自慢」が始まるからだ。この時間には、普段は呼んでも、なかなか来ない長男の直樹もいつの間にか現れて食卓についている。めいめいに「いただきます」といってから食事を始める。スパゲッティは出来立てが命だ。

突然、杉本が声を上げた。

「あっ、お祈り忘れた」

口をもぐもぐしながら、杉本は目を閉じ、頭を下げて無言で食前の感謝の祈りをした。

他の家族は「のど自慢」に夢中になっている。

以下は食事中的会話だ。

悟 「今日は新潟県だね」

直樹 「民謡を歌う人がいるよ。きっと」

美香 「今日のゲスト歌手は誰？」

インコ 「ミズシマ」

空歩 「ああ、今日はいいゲストだね」

皆は出演者の歌のうまさを評価する。

直樹 「だめだな。鐘二つだよ。(鐘) ほらね」

美香 「うーん。いい感じだけどなあ、もう一歩かな。(鐘) やっぱりね」

空歩 「おお、うまいね。鐘三つ。(鐘) あれ、今日は厳しいんじゃない」

和歌子 「うまい人が多い日はレベルが上がるのよ」

一同沈黙の後 「うまい。合格だね。そうだね。(鐘) やった」

熱帯魚の水槽の中の魚たちは、外の世界の興奮を誘う出来事には気づいていない。

悟 「審査員特別賞はこの九十五歳のおばあさんだよ。……ほらね」

空歩「チャンピオンは誰だ」

美香「この十番の女の人だと思うわ」

直樹「違うよ。七番の人だよ。練習すればプロになれるよ」

インコ「ミズシマダー」

空歩「みんな聞く耳がないね。歌は少し乱れたけど。このおじさんは聞かせる声だったから、この人だな。お願いします」

和歌子「誰にお願いしてるのかな」

空歩「やった。ほらね。審査員は聞く耳あるね」

庭の柴犬テリーは、ガラス越しにテレビを見て、喜んで「ワン」と鳴き、自分のしっぽを追いかけてぐるぐる回り始めた。

五回中、四回はチャンピオンを言い当てる杉本空歩は、歌に関しては、みんなの尊敬を得ていた。

今日も気を良くした杉本は、すぐに背広とネクタイに着替えると、ジャンパーを羽織り、自転車に乗って「コーヒーハウス」へと向かう。見送る和歌子は夫のスーツ姿が好きだ。結構カッコいい。息子の悟も自転車に乗って後を追う。悟は九月ぐらいから毎週一緒に行くようになっていた。杉本が、「子供用の面白そうな本や、昆虫とか魚の詳しい図鑑もたくさん置いてあるよ」と誘ったからだ。悟は「魚博士」だったので興味を持って行ってみることにした。同じくらいの年の子供もいたが、話の合うおじさんと友達になった。それ以来一度も欠かさずに父親と共に通いつけている。

杉本と悟が出かけた後、直樹が「友達と将棋をしてくる」といって出かけた。美香も「友達と会ってくる」と言って出かけてしまった。

一人になった和歌子は、「さみしいわね」と口に出したが、「ビッグ・ブロンズ・タイム」の到来を悟り、にんまりとした。

家の中は暖かいが、外は冬の到来を予感させる寒さに、人々も自然も衣替えを急いでいた。

10 手話コーナー

「コーヒーハウス」に着いた杉本は、皆とあいさつを交わして、とりあえず左側の前列のテーブルに聖書やノートの入ったかばんを置いた。悟は図書棚の前の丸い絨毯（じゅうたん）マットに直行だ。この絨毯の上でなら、子供たちは多少のいたづらを許される。

杉本は、早く来ていた年配のろう者の夫婦と、覚えたての手話で会話をした。池さんと呼ばれているこの夫婦はまだクリスチャンにはなっていないが、十年近くここに定期的に参加して「ホーム・スタディ」の援助も受けている。援助者は森田夫婦だ。あの白髪ひょうきん男とその妻だ。二人は始めのころは手話での会話に苦労したが、今ではすっかり慣れてきて、池さんたちと不自由なく手話で意思を伝わしている。

森田夫婦によると、耳が聞こえないということは、聞こえる人が思うよりずっとたいへんな障害だという。音のない世界に住む人にとって文章を読むということは、ひどく困難なことだ。耳が不自由なく聞こえて育った人は、文章を読むとき、文字から音が聞こえてくる。それを頭の中で聞いて理解するのだ。しかし、生まれつき音のない人々は、文字の持つ音が頭の中でも聞こえない。それは単なる記号だ。微妙なニュアンスは伝えられない。平均的な日本人が、例えばギリシャ語を読む状況と似ているかも知れない。記号は見えるが音が聞こえてこない。何年も苦労して意味をたどることができるようになるかも知れないが、なんと味気ない学習だろう。

聞こえる者にとっては、日常の生活で当たり前になってしまっている音—ドアのノックの音も、すぐ隣にいる人の呼びかけも、ラジオの音も、車のクラクションも、風の音も、我が子の泣き声さえ—が聞こえないということの意味をなかなか理解できないのだ。

耳が聞こえないということは情報の障害とも呼ばれている。情報の多くは、実は、目ではなく耳を通して入ってくるのだ。だから目の見えない人は日常の行動には本当に大きな不自由を伴うが、音を聞き、音楽を聴き、自然に、話し歌えるようになっていく。一方、耳が聞こえない人は、発声器官に何の問題もないが、言葉を話すようになることは至難の業だ。

どちらの障害が重いかということではない。神は、障害を補う力も与えてくださる。

耳の代わりに目が、愛する人の声を聞く。目の代わりに耳が、愛する人の姿を見る。

そして、目も耳も失ったとしても、空気を感じる肌が、世界を描く。

あのヘレン・ケラーのように。

集会場の前のほうの左側は、手話コーナーと呼ばれている。通訳者が向かいあう形で座る。ろう者の出席が多い時は立って通訳することもある。通訳は数人の男女が交代で行う。演壇に立つ講演者や司会者の言葉を、ほぼ同時に手話で置き換えるのだ。上手な通訳者は講演者の言葉を一つ一つ手話に直すようなことはしない。日本語の意味を上手にまとめて、手話という言語の文法や慣習に合わせてゆったりと通訳してゆくのだ。目を細めたり、唇を尖らせたりすることにも意味が与えられている。話の内容によっては顔を

醜くゆがめたり傲慢な表情にもならなければならない。特に女性の通訳者はたいへんだ。

杉本は、「コーヒーハウス」に来るようになって初めて手話通訳を間近に見た。そして、いっぺんに魅せられたってしまった。すぐに手話の本を買ってきて、「あいうえお」の五十音を表す指文字を覚えた。得意の呪文覚えの要領で一気に暗記するのだ。そうした努力の甲斐あってか半年たつころには、どうやら、ろう者たちと会話をすることができるようになってきた。杉本は表情をほめられる。ろう者のものとは違うが、面白くて受けるようだ。早く自分も通訳をしてみたいものだと、ひそかに野心を燃やしていた。

杉本が見習う手本としているのが、若い青木武士だ。杉本が始めてここの集会に出席した時に、緊張した様子で、講演者を紹介していた背高男だ。後になって知ったのだが、青木は幼いころ吃音（きつおん）の障害を持ってしまった。クリスチャンの母は心配してあれこれと治療を試みたが、回復は不可能と診断された。もともとは青木と母親は東京の「コーヒーハウス」のメンバーであったが、埼玉の北浦和の「ハウス」には、ろう者が出席していて、手話による通訳が定期的に行われていることを聞き、母親と共に見学に訪れた。青木はすぐに手話に興味を持った。ここに自分の活路を見出すことができると直感したのだ。すぐに自分だけ、「北浦和コーヒーハウス」に移籍し、遠い距離を通ってきている。青木の手話の上達振りは驚異的だったらしい。

「コーヒーハウス」は年に二回、大会を開く。一回は地域の「ハウス」が集まるもので日本の十数か所で市民会館などのホールを借りて開かれている。各地で七百人から千五百人くらいの出席がある。もう一つは全国大会で、日本中の「ハウス」が一同に会する。出席は二万人を超えるようになってきた。面白いのはその会場だ。競輪場や競馬場を会場に変身させる。大勢のボランティアが前々日くらいから会場に集結し、徹底的な清掃を行う。その変わりぶりに驚いた地元の新聞が小さな記事にしたこともある。

出席者のための食事を自分たちで準備するのが伝統だ。大勢のボランティアたちが組織され、「炊事部門」は朝早くから、会場の敷地内に一時的に作られた炊事場で、大きな五徳の上の大きな鍋にビーフシチューを作ったり、野菜を刻んだりする。「給食部門」がそれを使い捨ての食器に詰める。というような具合だ。どの作業場でも人々は本当に楽しそうだ。冗談好きな男たちが必ずいて、元気な若い女性や主婦たちの笑いを取っている。

「兄弟、きゅうりはどれくらいの長さに切ったら良いですか」

「四センチ二ミリでお願いします」

「ケラケラケラ（笑い）」

というような感じだ。

このような大会の一つで、青木武士の経験談が「インタビュー」という形で行われたことがある。日本語で質問する司会者に、青木が「日本手話」で答え、それを通訳者が同時に「日本語」に直すという方法だ。経験談の中で、青木が今まで吃音（きつおん）のために苦労してきたこと、「ハウス」の集会でも同年代のほかの男子のように話せずに悔しい思いをしてきたこと、今は手話のおかげで夢がたくさん叶っていて神に本当に感謝していることなどが、率直に語られた。

この経験談は出席者の涙を誘った。特に会場に設けられた大きな「手話コーナー」に集まっていたろう者の出席者たちに大きな感動を与えた。自分たちの境遇と重ねて聞き、感動したのだ。涙が止まらなくなった人たちも多くいた。休憩時間には目を赤く腫らした人々が青木のところに感謝の言葉を述べるために集

まってきた。

さて、そんな青木が今、「北浦和コーヒーハウス」の集会の始まる時間に、通訳者の席についた。数人の聴覚障害者が前列に並んで座っている。池さん夫婦ともう一組の年配の夫婦。そして中途失調の主婦と若い女性の二人、合計六人だ。杉本はそのすぐ後ろの、通訳が良く見える位置に座った。息子の悟は仲良しのおじさんと一緒に、後ろの窓際の席に座っている。

演壇に立った男が始めの賛美歌を紹介した時、何か気配を感じて、杉本は後ろを振り返った。すぐ後ろの席に。見慣れた顔、娘の美香と、その親友、芳子の顔があった。「あれっ」と大きな声が出てしまった。

美香と芳子は、「しっ」と人差し指を唇に当てて、杉本に笑いかけていた。

1 1 同窓会

十一月の終わり頃、杉本和歌子は高校の同窓会に出席した。

和歌子は浦和市の女子高を卒業して、すぐに埼玉大学の教育学部に入学した。そこで杉本と出会ったわけだが、在学中は、特にお互いを意識したことはなかった。「児童文学研究会」に所属する杉本を時々見かけて、変わった人だな、と思ったくらいだ。「小学校課程」を選んだ和歌子は大学の自由な授業を大いに楽しんだ。幼いころから独学で学んできたピアノが役に立った。

三歳の和歌子に両親はおもちゃのピアノを与えた。鍵盤が十五個くらいしかないもので、音も調子外れだ。しかし、和歌子は楽しそうに打ち鳴らしていた。それを見た両親は、耳が変なふうに音を覚えてはいけなないと考え、少しお金を奮発して本物のピアノを買った。このピアノは和歌子の宝物になり、今でもリビングルームに置いてある。

暖かくなったこの日は、前日の雨と風で振り落とされた木々の葉が、道路の端のあちらこちらに吹き溜まりとなって厚く重なっている。和歌子はバスと電車を乗り継いで同窓会の会場へと向かった。

ホテルの一室を会場として借り切っていた。到着した和歌子を、すぐに懐かしい顔ぶれが歓声を上げて迎えた。にぎやかな会話があちこちのグループから聞こえてくる。一人ひとりの近況報告が済むと、やはり昔の仲良したちが集まって昔話を始めた。話は和歌子の結婚式に及ぶ。和歌子は皆からチャッピーと呼ばれていた。旧姓が「茶木」だからだ。

「チャッピーが杉本ソランさんと結婚した時は笑ったよね。『宇宙少年ソラン』だもんね」

「そうよ。大うけだったわ」

「それでさ。結婚式の時に皆で練習して宇宙少年の歌を歌ったじゃない」

皆はまだ覚えている歌を大声で歌い始めた。

ソラン、ソラン、ソラーン。はるかなー宇宙ーかーらー
ソラン、ソラン、ソラン、時を越ーえてやってきたー
さあ行くぞ、チャッピー。みんなが待っているー
宇宙うー少年ソラン、ソラン、ソラン、ソラーン

再び爆笑が会場中に巻き起こった。

ちなみに、夫の杉本空歩の愛唱歌は、テレビ漫画の主題歌だったこの歌と、気分がいいときに自然に出てくる「夢路より」と、元気のいいときに出てくる「カーモメ飛ぶあーおい空、ひかり輝くうなばーら……」という歌だ。題名は忘れた。アキレス腱を切って入院した時に足のギプスに描いた落書きには、ちゃんと

「リス」のチャッピーが描かれていた。

「ねえ、ソランさんはどうしているの」と親しかった木綿子(ゆうこ)が尋ねてきた。モメンちゃんという愛称だ。

「ソランはねえ。最近、聖書と手話に凝ってるわ」と和歌子は答える。

モメンちゃんはびっくりして言う。

「えっ、まさか『コーヒーハウス』じゃないわよね」

「どうして知ってるの」と和歌子。

モメンちゃんは説明する。

「私の夫のお母さんがね。そこの信者なのよ。夫も子供の頃から聖書を教えられて育ったんだけど、中学生くらいから、反抗して集会に行かなくなったんですって。お母さんは優しくとてもいい人よ」

「ふ～ん。そうなんだ。偶然だね」

杉本和歌子は親しい知り合いの中にも「コーヒーハウス」つながりの人がいることに驚いたが、心強く感じたのも事実だった。

12 三博士

再び十二月がやってきた。今年は寒くなるのが早いようだ。めったに雪が積もらない埼玉でも今年は雪の多い年になりそうな気配だ。杉本は毛糸の手袋をして、自転車にまたがった。悟と美香も後から追うようについてくる。三人の息が白かった。

コーヒーハウスでは大きな薪ストーブが、来る者すべてに幸せな暖かさを分け与えていた。集会が終わるといつものように暖かな「コーヒータイム」だ。誰もがこの時間を愛している。すぐに帰らなければならない人たちもいたが、たいていは少しの時間の雑談を楽しんでから家路に着く。ここのコーヒーはおいしい。集会后すぐに、息子の悟と親しくなった男が本格的に淹（い）れてくれる。杉本はひそかに「マスター」とあだ名をつけていた。男は杉本より少し若い、三十代の半ばくらいだろう。小さな子どもにも好かれるらしく、先ほどから、あのレナちゃんと、ヤスタカちゃんと、双子のトシヤくんとハヤトくんを代りばんこに抱っこしたり、両手を持ってくるっと回転させたりしている。

杉本の「ホーム・スタディ」の援助者の依田純一と、ろう者の池さん夫婦の「ホーム・スタディ」の援助者の森田と、もう一人の男、江利山は、たいてい一番遅くまで残って会話をしている。杉本もなるべく粘って三人の会話に耳を傾けるようにしている。

江利山は体格の良い大男で、太い声で話す。正義感の塊のような男だ。例えば、禁煙の電車の中でタバコをすっている男を見かけると、遠くからでも「おーい。ここは禁煙だぞ」と大声で叫ぶ。道をよたよたと歩いていたおばあさんを、誰かが肘で押しのけた時、「おーい。その男！ おばあちゃんに何やってんだ！」と怒り心頭に達して怒鳴った。怒鳴られた男は恐ろしくて震えていた。

江利山の妻、亜矢子は面倒見の良い女性で、日本茶や紅茶をテーブルについでいる人たちにいそいそと運んでいる。男たちの話が盛り上がっている時に、「お菓子はいかがですか」などと水をさすのが唯一の欠点だ。

江利山は「言語君」というあだ名を持っていた。言語に強い関心を持っていて、英語の力はかなりのものらしい。手話の通訳も担当している。聖書がもともと書かれた言語であるヘブル語とアラム語、そしてギリシャ語の知識も豊富に持っていた。江利山のおかしな癖は、日本語の人の名前や地名を英語に翻訳しようとする事だ。

「杉本さんの名前は英語にすると、えっと。シーダー・ブックだね」

もちろん江利山のエスの発音は正確だが、日本語ではなかなか表記できない。

「下の名前は何ていうのだけ」

「そらんです。空に歩む、と書きます」

「では、スカイ・ウォークだね。簡単だ」

江利山はちゃんと口を丸く突き出してダブリューの発音をしているが、これも表記できない。

いつもはカウンター越しに、子供たちにまわりつかれながら黙って話を聞いている「マスター」が珍しく口を挟んだ。「ヨーダ兄弟が援助しているスカイウォーカーさん……面白いですね」

男は映画「スター・ウォーズ」のことを言っていた。ジェダイ・マスター（達人）のヨーダが、若きリーダーのルーク・スカイウォーカーを導き、「フォース」の力を使うことに開眼させる。小さなおじいさんの外見をしたヨーダが敵と戦う場面は圧巻だ。「ヨーダ強い」と誰もが言葉に出してしまう。もちろん、この映画のことは、ここには他に知る人はいない。いや、杉本だけがニヤッと笑ったようだ。

「言語君」の江利山に、「歴史家」の森田、それに「ロマンチスト」依田純一を加えた三人は、いわば「三博士」だ。誰もそんなふうには呼んでいないが……。この三人は『北浦和コーヒーハウス』の「エルダー」だ。「エルダー」とは、長年、真剣にクリスチャンの活動に専心してきた「兄弟」たちの中から推薦されて選ばれる。資格は、聖書の中に略述されている条件に適い、特に人々を教える点で秀でていなくてはならない。

短髪の「言語君」の説明に耳を傾けてみよう。本当はギリシャ語やラテン語の原語の説明が入っていて難しいので、大幅に簡単にまとめる。

「このエルダーという英語の言葉は、もともとのギリシャ語を翻訳したもので、『年長者』とか『長老』という意味だね。ちなみに文語の『執事』にあたる立場は、英語ではサーバントと呼ばれていて、エルダーたちを補佐する務めがある。青木兄弟や、こちらのマスターの中沢兄弟がそうだね」

江利山は男を「マスター」と本当に呼んだ。中沢と呼ばれた男は色白で整った顔立ちだ。瞳の色は薄く、灰色がかった茶色をしていた。子どもたちの人気者だ。

話を白髪の「歴史家」森田が引きつぐ。これも簡単にまとめる。

「キリストの死後百年ぐらいたつと、聖書の中に書かれている長老とか監督と呼ばれる立場の人たちのなかから、広い地域を管轄する司教と呼ばれる立場が作られるようになりました。こういう制度は今もカトリック教会に引きつがれています。さらに二百年ほど経ち、西暦325年に、かのニケア公会議を迎えるのです……。まあ、難しい話はこれくらいにして、どうですか、モーいっぱい牛乳でも、はははは」明らかに杉本の頭がついてきていないことに気づいた森田は話を終わらせた。

この三博士たちと他の数人の「兄弟たち」の間で流行っている遊びがある。「聖句当てゲーム」別名「ですなゲーム」だ。会話がたまたま聖句に関連する話題になった時に、誰かが、その聖句の筆者の名前を挙げる。例えば、「パウロですな」とか「ペテロですな」となぞ掛けのように発言するのだ。良く知られている聖句ではクイズにならない。たいてい全員が、即座に聖書の章句を正しく言い当ててしまうからだ。それで皆は時々、マイナーな聖句をひそかに準備してくる、そして話が、関連したことに及ぶと、おもむろに、「モーセですな」などと言うのだ。

皆がすぐに答えられない場合、出題者は得々として「何々書の何章何節ですな」と正解を述べるができる。出題者自身も答えがあやふやな場合が時々あるが、そんな時は皆は自分の聖書を開き、聖句を探し始める。一番先に探し当てることを競うのもゲームの一部だ。

杉本はこの遊びには、なかなかついて行けなかった。しかし、今日は一つの聖句を準備して、その時が来るのを虎視眈々（こしたんたん）と待っていた。杉本は何気なく話し始める。

「私は高校生の時に山岳部に入っていましたね。冬山の景色が忘れられません。晴れた日の空の色は、青を通り越して黒くなってくるのですよ。雪をビスケットに挟んで食べたのも懐かしい思い出です」

次の瞬間、その時は来た。「言語君」が「山登りはいいね」と発言したのだ。杉本は即座に、大げさに言った。

「山と言えば……ダビデですな！」

皆は、とっさに答えられなかったので自分の聖書を急いでめくり始めたが、なかなか見つからない。やったと杉本は内心で快哉を叫んだ。そして、もったいぶって「詩篇 121 編の 1 節と 2 節ですな」と告げてから、暗記した言葉を高らかに声にした。

われ山にむかいて目をあぐ わが扶助 (たすけ) はいづこよりきたるや
わがたすけは天地 (あめつち) をつくりたまへるエホバよりきたる
(詩編 第 121 編 1、2 節 文語訳)

この聖句に杉本は見覚えがあった。高校時代に映画「サウンド・オブ・ミュージック」の原作を読んでいたときのことだ。著者であり主人公でもある修道女マリアが何かの時に引用したのではないかと思うが、山岳部に所属していた杉本には、「山に向かいて」の部分が強く印象に残った。最近になって聖書のページを繰っている時、偶然にこの言葉に出くわしたのだ。文語の調子がとても良いので、杉本は例によって、呪文のように暗記した。そして会話を山の話に向ければ、「ダビデですな」と言えるのではないかと踏んでいたのだ。

依田は頭をかいて、「やられましたね。でも本当に良い聖句ですね。『われ山に向いて……』」と、もう口に出して読んだ。厳密に言えばこれはダビデ作であるかどうかは分からないのだが、そのことには触れないでおいた。

森田は、「知っていたのですがね。場所がとっさに浮かびませんでした。負け惜しみですな」と、悔しそうな顔をした。

「僕の『山登り』という言葉を待っていたんだね」と、江利山はしてやられたという表情を浮かべた。

森田の妻の直子が話に加わった。夫とおそろいのきれいな白髪だ。

「私は股関節が悪いので本当の山登りはできませんけど、『エホバの家の山』には登っていますよ」

「うまいことを言いますね」と一同はほめた。

「イザヤ二章二節ですな」と夫の森田が恐縮してボソッと行った。

杉本は「そういえば……」と以前から気になっていたことを思いついて語った。

「初めてこの集会所に来た時から思っていたのですが、足の悪い人や身体障害者が車椅子でここに来た場合、その階段を上るのはたいへんですね。エレベーターでもあればいいのですが、無理ですよ」

そう言うってから杉本は時間を見て、もう帰らなくては、と帰り支度を始めた。悟と美香に声をかけてから、

残っている皆に「さようなら。また来週」と挨拶をして階段を下りていった。

残された三博士はまだ話し足りない様子でお互いの顔を見ていた。

13 恐竜

寒い日々で始まった十二月も半ばになると晴れた日が続き、厚着をしていると汗ばむこともあるほどだ。しかし町にはもう、クリスマスの装いと「ジングルベル」や「ホワイトクリスマス」、若い人に人気の「クリスマス・イヴ」などのクリスマスソングがあふれている。和歌子の勤める「さいたまフード」も連日、賑やかな、あるいは厳かな、歌と音楽を流していた。クリスマスと年末の、大売出しのために大忙しの日々だ。

依田と杉本が「ホーム・スタディ」をしている間も、和歌子は家事をしながら、耳にこびりついているクリスマスの歌を口ずさんでいた。

インコのクッキー・クッカー・ピッピーは「おーいミズシマ、カエロウ」と誰かに呼びかけていた。

今日の依田は、寝違えたらしく首に目立たないようにトクホンを何枚か貼っていたが、臭いですぐに分かってしまう。首の角度が少し曲がっている。勉強が終わって紅茶を準備し始めた時、珍しく二階から中学生の直樹が降りてきた。

「ああ、直樹君、こんばんは。お元気ですか」と依田が、不自由な首を後ろに向けながら声をかけた。

直樹は返事もせずに依田に近づくと、いきなり質問した。

「聖書に、恐竜は出てきますか」

何が始まるのかと父と母は固唾をのんだ。

直樹の質問は依田純一には簡単な問題のようだった。以前に美香に尋ねられたときとは打って変わって、その首の角度で示せるだけの、余裕を見せて答え始めた。

「直樹君は恐竜が好きなのでしたね。実は私も子供の頃、恐竜に夢中になっていたことがあるのですよ。施設の、……育った家の本棚に、『恐竜の話』という本があって、お気に入りのページにはたくさんの恐竜の絵が描かれていました。草食の大きな『ブロントザウルス』とか、肉食の『ティラノザウルス』とか、サイをもっとずっと大きくしたような『トリケラトプス』とかを今でも覚えています。でも、一番のお気に入りは『ステゴザウルス』でした。名前の『ステゴ』という部分が『捨てられた子供』の『捨て子』に聞こえて可愛そうでなりませんでした」

依田は悲しそうな表情をしたが、すぐに話を続けた。

質問者の直樹は、大きな興味を持って耳を傾けた。

「聖書の創世記というところには始めの第一章に、神様が天地を作った順序が書かれています。

はじめに神は天と地を創造された (創世記 第1章1節 口語訳)

これは何十億年も前のことだと思います。

「そして神様は地球に注目します。そして『一日目』に光を作ります。たぶん、地球の表面に太陽の光が届くようになったことだと思われます。

『二日目』に大空の上の水と、下の水の間ができて『大空』と弥ばれます。たぶん、下の水とは海のこと、上の水とは厚い雲のように地球を覆っていた水蒸気の層のことではないかと考えられています。ここで言う一日とは二十四時間の一日とは限りません。もっと長い一定の期間のことです。もっとも神様なら時間を早回しして二十四時間でそうすることもできるでしょうね。

『三日目』に海に陸地が現れて、草や木や果物を作ります。

『四日目』に太陽と月を作ります。これはたぶん、地球の表面から、太陽や月の輪郭がはっきり見える様になったということではないでしょうか。

そして『五日目』です。水の中の生き物と空を飛ぶ生き物と「大きな海の巨獣」と他の動物たち、つまり鳥や爬虫類や昆虫も作ります。

最後の『六日目』に陸に住む哺乳類の動物、ライオンや熊やウサギなどたくさんの種類の動物を作ります。最後に、そう、人間の夫婦を作ります」

『アダムとイブ』ですね。知ってます」と直樹が食いついていた。

依田は「そうです。良く知ってますね」とほめてから、

「神様が恐竜を作ったのは何日目だと思いますか」と尋ねる。

直樹は創世記の記述をまじまじと読み返しながら答えた。

「もしかしたら、『五日目』の『大なる魚』のことではないかな」

「いや、それは鯨のことではないの？ でも鯨は魚じゃないか」と杉本も食いついてきた。

「そうか、だとしたら、『五日目』のほかの動物に含まれるのかも知れない。だって恐竜は爬虫類説と鳥類説があるから、どっちにしても『五日目』だよ」

と直樹も、知識のあるところを披露した。

「いつごろまで恐竜が生きていたのかは分かりません。ノアの方舟には乗らなかったのでしょうか。聖書の物語を絵本にしたものがありますから、来週、直樹君に差し上げますね。恐竜も出てきますよ」

依田が「おいとまします」と、首をかしげたまま帰った後、和歌子は夫に話しかけた。

「ねえ、依田さんってまだ独身なの」

「そうらしいよ」と杉本。まだ創世記を眺めている。

和歌子は気になっていたことを口に出した。

「依田さんってどんな風に育ったのかしら」

杉本も本気で加わってきた。

「うん。そういえば……、さっき施設って言ったよね。捨て子だったのかな」

直樹は、父と母の会話を聞いてか聞かずか、無関心を装いながら二階へと消えた。その手には依田が残っていたパンフレット「若者の質問に答える」が握られていた。

14 和歌子の驚き

クリスマスが今年もやってきた。期待通り、寒くて雪が降って来そうな天気だ。貧しいマッチ売りの少女が凍えていなければいいのだが。犬のパトラッシュと少年ネロがちゃんと天国に召されればいいのだが。寂しがりやのローリーが隣家の四姉妹と早く友達になればいいのだが。寄宿舎のマルチンが、なんとか父母の待つ我が家へと帰ればいいのだが。

五日ほど前の夕食の時、「今年はクリスマスを祝わない」と、突然、杉本は家族に宣言した。

和歌子は、何のことだか分からない。

美香と 悟は 知らん顔
直樹はにやにや にやけ顔

太郎の屋根に雪ふりつむ
次郎の屋根に雪ふりつむ

「どういうこと？」と、頭に雪が降り積もった気分の和歌子が口に出した。毎年「さいたまフード」で売れ残ったご馳走を、ただみたいな値段で譲り受けてきて、クリスマス・ディナーを準備した。ちょっと奮発したワインを夫婦で飲むというのが定番だった。今年はそれをしないってこと？

「いや、そうじゃないんだ」と和歌子の頭の中を読んだかのように、杉本空歩は説明した。「今は十二月二十五日がキリストの誕生日だと思われているけど、良く聖書を調べてみると、そうじゃないらしいんだ。イエス・キリストが生まれた時は、羊飼いたちが外で野宿をしていたんだけど、イスラエルの国では十二月はとても寒くて、羊飼いが野宿をするなんてトンでもないことなんだ。どうやら、この日付は昔のローマ帝国の中で、昼間の時間が一番短くなる冬至の日で、太陽が生まれ変わってまた日の長さが長くなること祝ってお祭りをしたらしいんだ。プレゼントを交換する習慣もそこから来たんだって。※カトリックの百科事典にだってちゃんと書いてあるのさ。それにね。クリスマスを盛大に祝うようになったのは最近のことで、※三百年前くらいのアメリカでは、クリスマスは異教の祭りだから祝ってはいけないと禁じられていた時もあったのさ」

※新カトリック百科事典……「キリストの誕生は冬至（ユリウス暦では12月25日）と決められた、なぜなら、この日は太陽が北の空に戻りはじめるので、異教徒のミスラの神の帰依者たちが『征服されざる太陽の誕生日』を祝ったからである」

※三百年前……西暦1659年から1681年に、アメリカの清教徒（ピューリタン）はクリスマスを異教の習慣として禁じた。

杉本は一気に説明した。和歌子を説得できるのだろうか。

「ふ～ん。クリスマス祝わないクリスチャンなのね。あなたたちは」と言って和歌子は、懇願するような顔の夫と、目を合わせないようにしている娘と、魚類図鑑を読むふりをしている息子とをにらんだ。もう一人の息子は、珍しくニヤニヤして事の成り行きを見守っている。

「クリスマスのご馳走も食べないということね。ケーキも無しね」

悟が口を出した。

「クリスマスと関係ないのなら、ご馳走やケーキを食べてもいいんだって、中沢兄弟が言ってたよ」

美香が口を挟む。

「でもクリスマス日に食べたらどうかな。次の日に食べればいいじゃない」

和歌子は皆をにらみながら、すっと立ち上がった。そしてリビングルームの壁にかけてあるカレンダーに近づき、指でなぞった。

「十二月二十七日は火曜日でスーパーが休みの日だから……うん、二十六日の夕方はいろいろ安くなってるとも知れないわね。ケーキは二十五日の売れ残りをもらって冷蔵庫に入れておけば大丈夫ね。いいわよ。今年は二十六日にしましょ」

長男の直樹はガッツポーズを作った。最近、以前みたいに陽気になってきている。

夫と美香と悟は、力が抜けて、テーブルに突っ伏した。

15 和歌子の憤慨

クリスマスが終わり、次の日のご馳走も終わって杉本家には平穏な日々が続いていた。

冬休みになった子供達は思い思いに毎日を送っている。美香は芳子と、それに『北浦和コーヒーハウス』で知り合った斉藤純子と、時々待ち合わせて出かけている。斉藤純子は杉本が初めて日曜日の集会に行ったときに声をかけてきた、満面の笑顔と魅力的な眼差しの、あのおさげの娘だ。韓国の女優に似た人がいるな、杉本は思っていた。通う高校は違うが、美香と芳子とは昔からの友達のように息があった。直樹と悟も、それぞれの友だちと将棋をしたり魚釣りに出かけたりしている。夫の空歩は、年末年始の休みが早く来ないかと仕事に精を出している。インコのクッキー・クッキーは鳥かごに入れてあげた小さな鏡を見つめて、ご機嫌に「ミズシマミズシマ」言っている。

十二月二十七日のことだった。夫と子供達が出かけている午後、和歌子の家の電話が鳴った。スーパーの定休日なので、ビッグな「ブロンズ・タイム」を満喫していた和歌子は機嫌よく電話に出た。悟の通っている小学校からの電話だった。

電話をかけてきたのは学校の教頭先生だった。電話口の女性の教頭は少し息を荒くして話した。以下はその内容だ。

「悟君が、この間の学校のクリスマス会のときに出されたケーキを食べようとしなかったので、不思議に思って尋ねてみたのですが、クリスチャンはクリスマスを祝ってはいけません、と言っていたのです。失礼ですが、もしかしたらお宅は『コーヒーハウス』の信者なのではないでしょうか。信仰は自由ですが、子供のうちはあまり縛り付けずにのびのびと育てたほうが良いと思うのです。大人になってから良く考えて、信仰は選べば良いのではないのでしょうか。失礼ですが、『コーヒーハウス』の人たちは子供を虐待するとの評判があるのです。実は、私は教会に通っているのですが、牧師さんは『コーヒーハウス』の人が家に来て耳を傾けてはいけなさと時々注意しています。……うちの牧師さんはあまり厳しいことは言わないですよ。お正月に神社にお参りしても聖書の神様にお祈りすれば大丈夫だと言ってくれますよ。うちにも子供がいますが、教会に行くことを強要してはいないのです。最近あまり興味を示しません。それでも良いと思っています。とにかく普通の人生を送ってもらいたいと思っています。杉本さんは信者ではないようですので安心しました。色々言いましたが、心配になってしまったものですから。とにかく、子供たちは、押さえつけると良い性質が伸びないので、よほど悪いことをしない限りは自由に育てるのが一番なんです。ご主人がちょっと心配ですね。良く話し合ってみてくださいね。では失礼します」

和歌子の午後は崩壊した。

和歌子は久しぶりに自分が教師だった頃のことを思い出した。あの時も教頭先生と校長先生は苦手だった。私だって教育に関する信念だってある。先生だった時だって、自分の子供を持つようになってからだって、のびのび育ててきたつもりだ。それに肝心なところでは厳しい先生にだってなれた。空歩は優しくすぎて、子供になめられちゃって学級崩壊になっちゃったけど、家では良い父親だ。でも確かに調子に

乗りすぎて失敗することも多いけど。「コーヒーハウス」の人たちも何人か会っているけど、そんなに悪い人たちだとは思えないし。でも、まだ私の知らないこともあるのかなあ。空歩はお人好しだから、利用されないとも限らないし。少し心配になってきたわ。

その日と次の日の夜まで、和歌子の機嫌は悪かった。なんとなく察した家族はあまり騒がず、おとなしくしていた。そして、その夜は、いつものように、依田純一が和歌子の家を訪れた。和歌子の機嫌はまだ直らないが、夫と依田の勉強後、ちゃんと紅茶を二人に出した。

そして和歌子は突然、宣言した。

「依田さん……。私にも聖書を教えてください」

びっくりした男たちは、口を開けたままだった。

「おーい、おーい」と、黄色いインコがつっこみを入れていた。

和歌子の宣言は杉本にとって「ベースキャンプ」にたどり着いたような安心感につながっていた。

16 魂（たましい）

杉本は歌うことが好きだ。気が付くと必ず何かの歌を口ずさんでいる。そうでない時は口笛を吹いている。自分でもよく飽きないなあと、あきれることもあるが、止まらない。知っている歌には限度がある。それでも、うろ覚えの歌は次から次へと杉本の頭に浮かぶ。そしてその歌が終わる頃、何かの連想や、音の類似性などで繋がっている次の歌へと続く。例えば、こんな風に。

「苦しくたって悲しくたってコートの中では平気なの……」

「思い込んだら試練の道を行くが男の生きる道……」

「人生楽ありゃ苦もあるさ挫けりゃ誰かが先に行く……」

「男だったら一つに賭ける賭けて纏れた謎を解く誰が呼んだか誰が呼んだか銭形平次……」

そう、これは、試練・苦しみ・頑張りつながりだ。前半は漫画のテーマソングで、後半は時代劇のテーマソングというつながりもある。

ジャンルを問わず、「いい歌だな」と思う歌はわざわざ歌詞をなんとか調べ出して覚えることもある。最近覚えた歌は、尾崎豊の「アイ・ラヴ・ユー」だ。

中学生の頃、親にお小遣いをねだって中古のクラシック・ギターを八千円で買った。しかし上手にはなれなかった。いつかスチール弦のフォーク・ギターを買いたいと思いつつも、ずっとナイロン弦のこのギターを使って、「グレープ」や「かぐや姫」の曲を、へたくそに弾きながら、自己満足の歌声に酔いしれている。

「アイ・ラヴ・ユー」を練習しながらあらためて気が付いたことがある。歌によってはカラオケでは上手に歌えないということだ。自分の好きなところで長い間を取ってみたり、時には感極まって止まってみたりと、自分の呼吸に合わせて歌う時、初めて自分は「歌っている」と感じるのだ。呼吸は大切だ。自分には自分の呼吸がある。彼には彼の、彼女には彼女の呼吸がある。「僕には僕の夢があり、君には君の夢がある」のと同じだ。

杉本の聖書研究、「ホーム・スタディ」の資料は「見なさい、新しい天と地を」だったがこの薄いパンフレットは四ヶ月ぐらいで終わってしまった。その次に資料として選ばれたものは、例の「マインドコントロールとしての進化論」だった。これは勉強用のもものではなかったので、内容について疑問に思ったところや、さらに詳しい「進化と科学」という題の少し厚い本を参照しながら、それほど時間をかけずに終わった。その次に選ばれたのが、これもサブリーダーとして読んだことのある、あの「すべての答えは創世記の始めの三章にある」、略して「すべての答え」のパンフレットだ。

このパンフレットは、見かけは薄いだが、内容はものすごく厚い。これまで多くの哲学者、思索者が答えを探してきた質問である「我々は何処から来て、何処へ向っているのか」にきれいに答えているのだ。どうして神様は地上に悪が存在することを許しているのか、という大きな疑問にも、すっきりと答えていた。「考える葦」の一本である杉本は、このパンフレットに魅了された。そして、そこに参照資料として言及されているほかのパンフレットや数々の本を読みたいと心から思った。そして何より「聖書」の中に蓄えられ

ている廣大無辺の真理の泉から、あふれ出てくる水の流れに圧倒された。

このパンフレットの第一章は創世記第一章を扱っている。そして第二章は創世記第二章を扱っている。そして第三章は、そう、創世記第三章を扱っている。当たり前である。

杉本は今、第二章を学んでいるところだ。創世記第2章7節にはこのように書かれている。

主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。

(創世記 第2章7節 口語訳)

パンフレットの詳しい説明によると、「人は生きた者になった」の「生きた者」という言葉は、元のヘブル語では、「生きたネフェシュ」となっている。「ネフェシュ」は、「魂」と訳されることが多い。このヘブル語には「呼吸するもの」という意味がある。だから、例えば、創世記第二章十九節では、鳥や動物も「生物」つまり「生きた魂」と呼ばれている。鳥や動物も「呼吸する」から当たり前だ。魚も「魂」と呼ばれている。よく見れば魚もえらをパクパクさせて呼吸している。昆虫も「魂」と呼ばれている。呼吸はよく見えないけれど。じゃあ、石はどうだ？ まあ、いくらじっと目を凝らしても、すーすー呼吸はしていないみたいだ。じゃあ、植物、草や木はどうだ？

現代人は、植物もちゃんと酸素を吸収して、二酸化炭素を排出しているから呼吸していることを知っている。しかし、庭の白樺の木を、もし白樺があればだが、じっと見つめても、すーすーもフーフーもぜーぜーも呼吸してはいない。そのような動きがない。風に揺られて騒いではいるがね。それで聖書の中では、石や木は「魂」と呼ばれてはいない。身の回りのものを見回してごらん。スースー、すやすやと呼吸し動いているものが「魂」だ。あなたの胸を見つめてごらん。そう、あなたは「魂」だ。ゆりかごの赤ちゃんも「魂」だ。鳥かごのオオハシインコも良く見ると呼吸してるよ。水槽の中で追いかけてっこをしているグッピーたちも「魂」だ。ミミズだってオケラだってアメンボだって、僕らはみんな生きているんだ。「魂」なんだ。

ここから導かれる答えはなんでしょう？

そう、神様は、アダムに不滅の靈魂を、ぶにゅーと注入して、生きた人にしたのではなく、アダムの鼻に「ふーっ」と息を吹き込んで呼吸を開始させたということだ。そして人間は「呼吸する」生きた魂になったということだ。だから、人間が死ぬときには逆のことが起きる。

あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る。あなたは土から取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰る

(創世記 第3章19節 口語訳)

そう、「呼吸」を無くした「魂」は死に、元の土に返ってしまうのだ。死んだ後に魂が地獄で火に焼かれて苦しむなんてことはない。愛の神がそんなことをするはずがないだろう？ でも、アダムは残念ながら、自由意志を誤用して、命の源から自分の、見えないプラグを引き抜いてしまった。だから元の地面に帰ってしまいました。どこにもいなくなってしまったのだ。何でもまた、そんな馬鹿なことをしてくれたのだ。じゃあ死んだらもう何も無いの？ 希望はないの？

杉本にはこれからまだまだ学び、考えなくてはならないことがいっぱいあった。解けない疑問もいっぱい

あった。「ふーっ」と長い息が、杉本の口から吐き出された。はっきりしていることは、杉本は「魂」だ、ということのようだった。

17 建設ボランティア

寒い一月が過ぎ、二月も過ぎ、三月も、もうすぐ過ぎ去ろうとしている。北浦和公園にある古い小山は池の水面に映り、春の到来に浮かれたように揺れている。広場やグラウンドでは、待ち焦がれた春の訪れに地に足がつかなくなった子供達が、野球やサッカーに興じていた。学校は春休みだ。公園の緑はまだ遠慮がちだが、すぐに若草色の季節がやってきて、やがて、あのむしむしする、湿気と草の香りが漂う夏へと替わるだろう。しかし今は若草も腰を降ろすにはまだ足りない。

公園を見下ろす「北浦和コーヒーハウス」には別の意味で地に足が着かないくらい舞い上がっている人々の一群かいた。

二階の集会場には床一面にブルーシートが敷かれている。いつもの長い二つのテーブルに加えて、折りたたみできる足の着いた小さなテーブルがいくつも並べられていた。そしてどこからか借りてきた折りたたみ式のパイプ椅子がたくさんテーブルに添えられている。テーブルの上にはウーロン茶やコーラなどの飲み物や使い捨ての紙コップ、それに手作りのお菓子やケーキや買ってきたスナック食品などが並べられていた。

この日は、集まった人々によって集会場の改装が行われているのだ。しかし、プロの建設業者らしい立ち居振る舞いの人はほとんどいない。若い男女が中心になって働いている。良く見ると実際に改装の仕事をしているのは男性が多い。男性顔負けに動き回っている女性もいるが、ほとんどの女性は現場の掃除や休憩時間の接待などに加わり、楽しそうな歓声を上げている。年配の男女も微笑を浮かべながら働き人たちの様子を眺めている。ろう者らしき人も数人いて、楽しそうに手話で会話をしている。

建物の一階の、いつもは駐車場になっているところには、仮設の炊事場が設けられていた。得意の「ボランティア」によって朝昼晩の食事も作られている。改装に携わる人たちも皆「ボランティア」なのだ。このような活動は「建設ボランティア」と呼ばれている。主に近隣の地域にある「ハウス」の人々が、計画に従って、入れ替わり立ち代わり、やってくるのだ。

今回の改装の発端は、実は杉本空歩の何気ない言葉にあった。杉本は若い教師の時代に、身体障害者と接する機会が多かった。大学時代に強く引かれたのも「障害者教育」だった。障害児の研究や教育に実際に携わっている、大学の講師の熱い「魂」に触れて影響されたのだ。脳障害児を扱ったグレン・ドーマン博士の本は杉本のバイブルだった。この集会場に初めてきた時にも、つい、そんな目でやや急な階段を眺めたのだった。

杉本の言葉を真剣に受け止めた、かの「三博士」は入念に話し合い、このような時のために貯めておいた資金と、特別に呼びかけて集めた自発的な寄付をあわせて、エレベーターの設置と車椅子でも楽に入れるトイレを増設することに決めたのだ。ついでに外装のペンキの塗り替えと非常階段の補修などもあわせて行うことにした。日付は学校に通う若者たちのことも考えて春休みにあわせた。

地元の「北浦和ハウス」の面々も張り切っていた。我が「ハウス」の面々の活躍に、しばし注目してみよう。

「言語君」江利山の良く通る声は、どこにいても聞こえてくる。今、この「正義先生」は外壁の塗り替えのための「足場」を取り付けている。力も相当あるようだ。「ビテ足場」を一度に三脚運んでしまう。安全のためのヘルメットをかぶった姿は力強い。戦場で、こんな「鬼軍曹」が向って来たら、平然としていられる敵はいないだろう。江利山に勝てるのは、やはりヘルメットを被って腕組みをして近くに立っている妻の垂矢子だけだろう。

「歴史家」森田は建設のための図面を眺めている。頭の中には完成時の想像図が、はっきりと描かれていて、例えば、車椅子用のトイレの中に設置される手洗いのための手すりの位置と高さにまで考えは及んでいる。係りは「資材調達」だ。手足となって働いてくれる姉妹たちに向って、だじゃれを連発している。

日曜日の集会にようやく出席し始めた、杉本の妻の和歌子も、安全帽を被りながら張り切っている。現場をきれいにしておくための「清掃部門」で、ゴミを集めたり、テーブルを拭いたりしている。ただ、初日には現場作業のイメージが無かったために、お気に入りのふんわりとした花柄のワンピースを着てきてしまった。仕方が無いので、用意してあった大き目のエプロンを借りて作業をした。

この初日に、和歌子は、やはり自分と同じようなワンピースを着ている女性に気が付いた。良く見ると色違いなだけで、まったく同じデザインだ。その女性は、同じ「北浦和ハウス」メンバーの本田貴美だ。まだゆっくりと話し合う機会が無かったが、普段集会で見かける服装を見て、自分と好み似ていると感じてはいた。

「あら、杉本さんと本田姉妹の服は同じじゃない？」と目ざとい森田直子が遠慮なく指摘した。少し気まずい思いをした二人だったが、開きなおって、お互いの服を見せ合い、その服を買ったりサイクルショップが同じであることを突き止めた。

「いくらだったの？」と本田貴美。

「えへへ、セールで三百円でした」と杉本和歌子。

「えっ、私は五百円だった」と悔しがる貴美。

二人は背格好も顔立ちも良く似ていた。同じデザインの服を着ていると、まるで双子のようだ。少なくとも実の姉妹には間違えられるだろう。この時から二人は「和歌ちゃん」「貴美ちゃん」と呼び合うようになった。

現場の「三日目」には、和歌子にとって、別の出会いもあった。なんと、高校時代の仲良しの、あのモメンちゃんだ。モメンちゃんの義理の母である須藤悦子は、近くの川口市にある「川口コーヒーハウス」のメンバーだった。この日に「北浦和ハウス」の「建設ボランティア」に申し込んで、やってきたのだ。息子の嫁のモメンちゃん、須藤木綿子は聖書の話をして嫌がらずに耳を傾けていたので、この日は現場の見学に来るように誘ったのだ。和歌子も木綿子も、ここで会うことはまったく考えていなかった。それで再会した二人は、高校生のように大きな声で呼び合った。

「チャッピー！」

「モメンコ！」

そう、モメンちゃんのごく親しい友からは「モメンコ」とも呼ばれていたのだ。

びっくりして喜んだ二人は、フラメンコでも踊りだしそうであった。

さて、現場では、本田貴美の夫、本田穂積も大活躍をしていた。本田は人気者だ。抜群のギャグのセンスを持っていて、いつでもまわりの人を大笑いさせることができるからだ。「こんにちは。ハンサム本田です」が定番の挨拶だ。今日も「喫茶部門」で共に働く人々の輪の中で、笑いが炸裂していた。

本田はこだわりを持つ男で、乗っている自動車は「ホンダ」に決めている。ポタンダウンのシャツとツータックのズボンと三つボタンの背広をいつも着用している。イギリス紳士の抑えたユーモアとは少し種類が違うが、その切れ味鋭いギャグを、杉本は見習おうと考えて、ひそかに耳を傾けていた。今日の現場では、いつもと打って変わって、あちこちがペンキだらけのいでたちで、ローラーを使って壁の塗装をしているが、この外見の落差も、受ける要素の一つだ。

東京の「赤羽ハウス」から、手話に関心があって「北浦和ハウス」に移ってきた和子は、本田穂積に大笑いさせられていた。笑い上戸だ。和子はお化粧が得意で、若い「姉妹たち」の「先生」として引っ張りだこになっていた。どこから手に入るのか、試供品の化粧品や化粧道具をたくさん持っていて、ほしい人にはただであげている。

「キューポラのある町」の「川口ハウス」から、やはり手話を学ぶために移籍してきた祥子は、どことなく、女優の吉永小百合に似ていなくもない。おっとりしているので、本田のギャグの連発について行けないくらいもあったが、楽しそうに笑い、お茶やジュースを休憩に来る人たちにふるまっている。

最近集会を休みがちだった、「藤沢周平」ファンの「剣豪」加藤さんも、給食部門で小さな剣を振るってキャベツを刻んでいた。ここでも同好の志を見つけて楽しそうに「歴史談義」に花を咲かせている。加藤さんの奥さんも夫に連れられてしぶしぶやってきたが、人の良い笑顔で、お金にはならない「まかない仕事」に精を出していた。

ろう者の池さん夫婦は、二人とも七十を過ぎているのに元気だ。いつものようにお菓子をたくさん差し入れてくれる。二人は毎年、年末になると「北浦和ハウス」のほぼ全員を小さなグループに分けて、自宅での「寄せ鍋」パーティに呼んでくれる。「池さんのカニなべ」は恒例になっていて、皆楽しみにしている。

同じく、ろう者の夫婦、清瀬夫婦は長年のメンバーだ。二人とも六十歳を過ぎているが「忠実な夫婦」だ。夫は手話の先生だ。妻は最近パーキンソン病にかかってしまい、歩くことが不自由になって、杖をついている。妻が若い頃は陸上の選手で、百メートルを十二秒で走ったと、いつも懐かしく思い出を語る夫は、動きが不自由になった妻をいつも心配している。

若き天才、青木武士は、ろう者の近くにおいて、近づいてくる健聴者との会話の橋渡しに励んでいる。

コーヒー・マスターの中年男、中沢タケルは、ここでもコーヒーを淹れている。杉本の娘の美香と芳子と斉藤純子の仲良しグループは、この、子どもとしか話さない飄々（ひょうひょう）とした男に「スナフキン」というあだ名をつけた。

その仲良し三人組はあちこちを見学しては、ふむふむとうなずいたり、「ご苦労さまでーす」と建設ボランティアたちに挨拶をしている。ふんわりウェーブとおかっぱと三つ網にリボンの高校生トリオは疲れを知らない子どものように現場を飛び回っていた。

杉本の息子の直樹も、二日目にはやってきた。自分とあまり変わらない年齢の若者たちが真剣に作業をしている様子を見て、顔には出さないが感心しているようだった。

もう一人の息子の悟は、少し飽きたのか、「図鑑」の読書に励んでいる。

近頃、体調を崩しているロマンチスト、依田純一は隅のほうに座って人々を見守っているが、その手には雑巾が握られている。

杉本は、自分の発案で始まったというこのプロジェクトに、仕事休みの土日をフルに活用して、目を輝かせながら参加していた。

杉本は休憩時間に、現場の奉仕者たちの様子に関する自分の感想を、こんなふうに述べた。

「以前に見た『目撃者』という映画の中で、アーミッシュというアメリカのキリスト教の宗派の人たちが、皆で集まって仲間の家を建てる場面があって、その時もみんな楽しそうな雰囲気でしたが、この現場のほうがもっと楽しい感じですね。自分がこの中に居れることがとても嬉しいです」

この発言は「歴史家」森田の詳しい解説へと続いていった。

「アーミッシュは十七世紀のスイスで、指導者アマンの名前から生まれた呼び名です。彼らは迫害を逃れて、フランスに移住し、後にはアメリカに移りました。今でもスイス・ドイツ語を話して生活しています。ボタンさえ使わない、昔ながらの質素な服装で知られています。美しいヨーデルを歌いながら、仲良く暮らしているようですね。他にも十二世紀に始まり、後に厳しい迫害を逃れてフランスからドイツやイタリアへ逃れたワルド派と呼ばれる人々もいます。初期の彼らの聖書理解は私たちのものとよく似ているところがあります。しかしカトリックに迫害されて、今ではプロテスタントに吸収されてしまったようです。他にも『異端』と呼ばれて苦勞した歴史を持っているグループがたくさんありました。殺されたり家を奪われたり、たいへんでした」

森田は首を振りながら、ため息をついた。駄じゃれも出なかった。

約一週間後、工事は完成した。

エレベーターは無事に試験運転を終えて、みんなのために開放された。さっそく子どもたちは上へ下へとボタンを押しては「おー」と言いながら遊んでいた。この日は注意する大人はいなかった。

この時、仕事を早々に終えて駆けつけた杉本は、その後何年経っても、懐かしく思い出すことになる「大失敗」をすることになるのだった。注意する妻の和歌子は近くにいなかった。

18 プリンシプルと大失敗

日本人はプリンシプルを持たない国民だと、しばしば言われる。大らかな国民性はたいていのものは取り込んでしまう。その代わりに、拠って立つところの原理原則が不明確であるというほどの意味だろう。

確かに日本の歴史は、宗教に関しても全体に寛容で、大きな心で包みこんできたことを物語っている。大らかな、神々の道「神道」は、インド発で中国を経てやってきた仏の道「仏教」を、始めはいざこざもあったが、ほぼ完全に吸収した。もしくは吸収された。神仏一体だ。やがて鉄砲とともにカトリックのキリスト教が、熱心で犠牲をいとわない宣教者たちによってやってきて、「天主」を固く信じる強固な信徒たちを生み出した。やはり始めは大喧嘩もしたが、やがて仲直りをして、「神仏キリスト一体」を作り出したといえるかも知れない。

はるか昔の海岸で、砂浜にびっしりと「目」を出している貝を拾い集めて、塩茹でにして頬ばって、さわやかな海風に髪を揺らしていた、幸せな男女たちの子孫である私たちは、プリンシプルが無いといわれても、何かおいしいデザートでも用意しておくのを忘れたか、とただ頭をかくだけだ。みんなで仲良く暮らしましょう。そして祭りを楽しみましょう。

そんな日本人にとって、理解できない出来事が、世界との付き合いの中で起きてくる。

イギリスの皇太子チャールズさんが、日本の天皇の「即位の礼」に参列した時のことだ。イギリス本国では、皇太子は日本の天皇のために万歳をするべきではない、という世論が巻き起こったのだ。えっ、日本では嬉しいときには一歳の子どもだって「バンザーイ」とか「たかいたかーい」って言うのに。あっ、「たかいたかーい」は違うか……。とにかく深く意味なんて考えていないことが多いのだ。

ところが、イギリス国民は本気らしい。その緊張は日本のマスコミにも伝わった。万歳の時には、チャールズさんの姿をテレビカメラに映してはいけない、写真にとって新聞に載せてもいけない、ということになった。もちろん当のチャールズさんも、そのときはイギリス紳士の押さえた微笑を、さらに押さえて、複雑な心境の表情をしていた、と思う。もちろん、日本の天皇の支配をたたえる――とイギリス国民がみなしている――万歳はしなかった。

『コーヒーハウス』の人々は、人であれ物であれ、聖書の神のほかには、拝（おが）むとか崇（あが）めるということをしな。聖書の言葉に基づくプリンシプルを持っているからだ。

あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。それにひれ伏してはならない。

(出エジプト記第 20 章 3 節、5 節 口語訳)

彼らのプリンシプルは不動のものだ。どの国の元首や国王でも――深い敬意を払い、法律は良く守るが――崇拜行為は決してしない。イギリスの国王だって女王だって例外ではない。たとえ殺すと脅されようが、曲げない。曲がらない。

ヒトラーの時代がそうだった。第二次大戦中、ドイツで権力を握ったヒトラーが目の敵にしたのが、ユダヤ人と、「ハイル、ヒトラー（ヒトラー万歳）！！」と叫ばなかった人たちだ。その中に『コーヒーハウス』の人たちが確かにいた。彼らの中の多く人たちが、悪名高い強制収容所で命を落とした。

世界にはいろいろなプリンシプルがある。どれが良いとか言う問題ではなく、それを断固として守れる人か、守れないで妥協してしまう人か、が評価の対象になる。やはり、ちゃんと守れる人が敬意を得る。これは日本人だって、肝心なところでは分かっている。やっぱり信念の人はカッコいい。プリンシプルと未来への明確なビジョンを持った人が、結局、国家を動かしてゆく。坂本竜馬は、だからカッコいい。

プリンシプルを持つ人の中には、それを守るために自分の命だって喜んで投げ出す人もいる。例えば、愛する人のために身代わりになって死ぬ人は、「愛する人」がプリンシプルだ。ある教えを、死んでも守る人にとっては「その教え」がプリンシプルだ。そのことを表す、「殉教」という難しい日本語もある。

世界の歴史を調べると、いろいろな「殉教者」がいたことが良く分かる。例えば、今でこそキリスト教の「聖書」は、世界一のベストセラーになっているが、「中世」と呼ばれる時代の、ヨーロッパを中心とした世界では、聖書を自分の国の分かりやすい言葉に翻訳しようとした人たちは、迫害され、ひどい場合は、杭に縛り付けられて生きたまま燃やされてしまったのだ。ほんとにひどい！……。その人たちのプリンシプルは、「ボクは死んでも、みんなが聖書を読めるようにするんだ」、という信念だ。その人たちを殺した人たちのプリンシプルは、「皆の者の分かる言葉に聖書を翻訳するなどとは、死んでも許せん」という決意だ。その人たちは安全で、死ぬことはなかったのだけだね。どっちのプリンシプルが正しいのかは、歴史が証明する。神様が最後には証明する。さらに遠慮なく言えば、「正しさ」は、「殺される側」にあるということだ。大体そうだと思って間違いない。特に、無抵抗で「殺される側」には「正しさ」がある確率がとても高い。これは、杉本空歩がひそかに持っているプリンシプルだ。

さて、真新しいエレベーターの前の杉本空歩は、本当に舞い上がっていた。

『あなたが舞い上がって、回りが見えなくなっている時は、必ず何か失敗をするから気をつけてよ』と妻の和歌子は、常日頃、言っていた。長い付き合いだから、自然に注意報が「耳に」響くらしい。しかし、このときは、近くに和歌子がいなかった。

杉本は、興奮して、こう言った。多くの兄弟姉妹たちが聞いていた。

「本当に良かったですね……。みなさん、万歳三唱でもしましょうか！　せーの、バンザイ、バンザイ、バンザイ！」

杉本の頭上には、しらけた鳥が飛んでいった。

杉本は、我らが愛すべき、平和を尊ぶ日本人だった。

19 杉本の驚き

四月に入って間もないころ、その日はとても暖かな日だった。

杉本空歩は、「こんな日は、誰だって幸せになれるね」などと、のんきな気分になっていた。「北浦和コーヒーハウス」の集会場の窓辺には、ピンクや白の小さな花が飾られていた。

杉本は、どうしても我慢できなくなって、「基礎研究」の最中だったが、トイレへと席を立った。用を済ませてから、階段を上りきったところにある小さな窓から、明るい空の色を確かめ、「うん、『神は天にましまし世はすべて事もなし』……か」、とつぶやいた。

振り向いた杉本は、階段を、音を立てて上ってくる男に気が付いた。見たことの無い男だ。『間違って入ってきたかな』と思った杉本は、「こんにちは」と声をかけた。男は無言のまま、杉本の前を通り過ぎ、集会場のドアを開けて中に入っていた。杉本は何事だろうと、後に続いた。

お隣の国、韓国の「コーヒーハウス」の集会場が反対者によって放火されて、多くの犠牲者が出ていたことを杉本は思いだした。それを「いい気味だ」と笑っていた仕事場の同僚もいた。

「案内係」の若い男が、「こんにちは」と小声で挨拶したが、男は無言で、出席している人々を後ろから見回すと、急につかつかと一人の女性に近づき、いきなり後ろからその頬を平手で一回たたいた。その中年の女性は驚いて振り返った。女性の顔を見た男は、うろたえて、小さな声で「あっ、すみません」と言った。人まちがえのようだ。男は、しかし、ひるまずに近くに座っていた女性を見つけると、つつと近づいて、今度は三発の平手打ちを繰り返した。案内係の若い男はあわてて、その平手打ち男の体をつかみ、打たれた女性から引き離そうとした。あっという間の出来事だった。誰も席を立つ時間さえなかった。あの「軍曹」江利山でさえ、自分の席の後ろのほうで起きている出来事に気づくのに時間がかかった。

三回頬を叩かれた女性は斉藤梢（こずえ）だった。杉本が始めてこの場所に来た時に階段の上で出迎えてくれた、満面笑顔の母娘の母のほうだ。斉藤梢はすぐに事情を察したらしくおとなしく席を立ち、鞆に聖書とパンフレットを詰め込むと、男の後について集会場から出て行った。

突然の出来事に集会の進行は少しの間止まったが、すぐに再開した。ほとんどの者は事情を理解している様子だった。杉本はあわてた。自分の前を通り過ぎて出てゆく男と、おとなしく従う斉藤梢を口を開いたまま見送るだけだった。少し遅れて娘の斉藤純子もうつむきながら出て行った。

集会はそのまま進行していったが、やはり皆の心は穏やかではなかった。うつむいている女性も多くいた。ある者は声無き祈りをささげているようだった。

その集会後は、いつもに比べて明るい笑い声が少なかった。コーヒータイムを楽しむ者も少なくなった。

美香と芳子は仲良しの斉藤純子とその母を心配して、小さな声で話し合っていた。杉本の問いかけに答えて二人は事情を説明した。

美香「純子のお父さんは、お母さんが聖書を学ぶことに反対しているんだって」

芳子「でも、いきなり殴るかなあ、おどろいたな」

美香「須美姉妹もかわいそうに、間違えられて叩かれちゃったね」

芳子「最低だね」

美香「純子、泣いてたよ」

芳子「うちのかわいい純子を泣かせるなんて許せないよ」

美香「ソラン……パパはさあ、知らなかったの？」

杉本「うん、知らなかった」

芳子「今日だけじゃ、無いんだよ……ですよ。お父さんが機嫌の悪い時は、家でもびくびくしているんですって。お母さん、やっぱり時々殴られていたみたい」

杉本「集会の時はいつもニコニコしているから、ぜんぜん分からなかったなあ」

美香「ソラン……パパはのんきだからなあ。……今頃どうしてるかな、純子たち」

芳子「前みたいに、家の鍵を掛けられて、庭の犬小屋で寝たりしてないよね。なんか心配だ」

美香「ほんとだね。でも、純子のお母さんはさあ、すごいんだよ。前にね、お父さんの暴力がひどい時に、集会から帰って家のドアを開ける前に野球のキャッチャーが使うマスクとプロテクターを着けてから、ただいまって帰ったんだって」

杉本「えっ、ほんと？それでどうなったの？」

美香「そんな時はさあ、お父さんも笑っちゃって、大丈夫だったんだって」

杉本「へえ。すごいな。すごい姉妹だね。斉藤姉妹は」

依田純一が会話に加わって言った。

「今日はびっくりしましたね。最近の斉藤姉妹も、あまり家族のことはおっしゃらなかったのですが、たいへんな状況は続いていたのですね」

「どうしたら良いんでしょうか」と杉本は訪ねた。

「今は、祈るだけです。天の父に事態をゆだねましょう」と依田は短く答えた。

20 収穫

そんなことがあってから、二ヵ月後の六月のことだ。はっきりとしない天気が続き、その日は朝から雨が降り続き、肌寒い日となっていたが、緑の植物が多い『ハウス』の中は暖かだ。赤いトマトが栽培され……いや、それは置いてない。

斉藤梢と娘の純子は、あの出来事の後も集会を休むことは無かった。しかし、今日は集会が終わるとすぐに帰っていった。用事がある、ご主人と待ち合わせているらしい。

「歴史家」森田は、「コーヒータイム」に、嬉しいニュースをもたらした。

何事でもないかのように言い始める。

「斉藤姉妹のご主人と『ホーム・スタディ』をすることになりました。」

杉本は驚いた。

「えっ、あの斉藤姉妹ですか」

「そうですよ。ご主人は、なんでも歴史には興味があるらしく、それで私に白羽の矢がたった、というわけや。ははは」

いつもの調子だ。

白髪夫婦、森田と妻の直子は事情を説明した。直子の話は、得意の声帯模写つきだ。

直子、

「この間、斉藤姉妹に呼ばれて、うちの主人と一緒に姉妹の家に行ってきたのです。姉妹のご主人が、『俺も聖書を勉強する』と言ってるというから、びっくりしたけど、うちの兄弟（夫）と一緒に行ったのです。そしたら、あの斉藤さんが、にこにこして、『お呼びだてしてすみません』って挨拶してくれたんです。ほんとにびっくりしました。」

森田、

「斉藤さんの、あんな顔は見たことが無かったですね。別人かと思いましたよ」

「何があったのですか」と、依田と江利山が、同時に聞いた。「博士」もびっくりだ。

森田の妻、直子は説明を続ける。

「あの斉藤さんの『討ち入り』の後、家でこんなことがあったらしいの」

いつの間にか、「コーヒーハウス」にいる、ほとんどの人々が回りに集まってきていた。

青木武士は直子の話を、流暢に手話に直して、ろう者たちにも、ちゃんと事の成り行きを伝えている。

美香と芳子は手を握り合い、目を輝かせている。

直子、

「ご主人が興奮して、『お前との生活はもうたくさんだ。純子だって、俺とお前の間にはさまって可愛そうだ。もう、どうしようも無いから家を出て行ってくれ。何でも好きなものを持って行って良いから、とっとと出て行け』と言ったんですって。斉藤姉妹はね、『分かりました』と言って夫婦の部屋のダンスから、布

団を包むような大きな風呂敷をもってきたのですって。そして、それを広げてから、こう言ったのよ。『私が一番大好きなものを持っていかせていただきます。私が一番大好きで、大切にしているものは、あなたです。あなたを持っていきますから、この中に入れてください』ってね」

「おおっ」、皆の口から感嘆の声が漏れた。「やったね」と、双子のトシヤくんとハヤトくんが同時に言った。

直子、

「そしたらね、ご主人は驚いたらしく、それから一言も物を言わずに自分の部屋に行ってしまったのよ。そんなことがあって一週間後に、ご主人は突然、斉藤姉妹の前に土下座してこう言ったのよ。『梢、すまん。今まで、すまなかった。俺はどうかしていた。やっと気づいた。俺がどんなに反対して、ひどいことを言ったり、叩いたりしても、お前は一度も反抗しなかった。それどころか、ほっぺた、赤く腫らしながら、夕食を作ってくれたな。あったかい味噌汁を作ってくれた。俺、ほんとは、少し後悔したこともあったのだ。お前を好きで一緒になったのだからな。何やっているのだ俺は！ってな。でも、木曜日の夜は俺が帰ってきて、お前たちは『コーヒーハウス』に行っていて家にいないし。ご飯の準備はしてあったが……。日曜日だって、たまの休みだから一緒に動物園にでも行こうと思っても、やっぱりお前たちはいないしな。あの時は、いろいろと考えていたら、ムカムカしてきて、押さえられなくなってしまった。間違っ叩いてしまった人に謝っておいてくれな。びっくりしたろうな。いきなり後ろから殴られたんだからな。……とにかく今までのことは謝る。許してくれ。これからは好きにしてい。聖書の勉強を続けたっていい。考えてみれば、俺が家にいる時は、お前はいつもそばにいてくれたしな。亭主関白な俺に良くついてきてくれたよ。ふつうなら愛想をつかされていたかもしれないな。何でもお前の好きなものを買ってやるから、許せ。許してください。』」

直子は見ているように話した。涙を流している者も多くいた。

「そしたらね。斉藤姉妹はこう言ったのよ。『許すなんて。とんでもないです。あなたに寂しい思いをさせていたことは分かっていました。私こそ許してください。私も苦しかったのです。でも、聖書の教えは、私に生きていくための希望をくれたのです。聖書を学ぶ前には、純子と一緒に自殺することも考えたことがありました。でも聖書を学んだおかげで、生きている意味を見つけられたのです。この教えを捨てることはどうしてもできませんでした。わたしこそ、すみません。許してください。私は何にもほしいものはありません……。いいえ、一つだけありました。私の願いをかなえてくれますか』『ああ、何でも言ってくれ』『私と一緒に、聖書を学んでください。お願いします』……ご主人はびっくりしたわ。でもね、ゆっくりと、こう答えたの。『分かった。男の約束だ。俺も勉強する。だけど信者になるとは限らんぞ』ってね」

直子の声帯模写に、いや説明された情景に、皆は感動した。

斉藤純子とは親友同士の、美香と芳子の涙は止まらなくなっていた。

「良かった」

「良かったね」

「良かったよ」

「ほんとに良かった」

「泣いてしまうわ」

その日の『コーヒーハウス』の中では、外にそぼ降る雨を忘れて、「大収穫」の喜びがあふれていた。フキの葉に似た、観葉植物の大きな葉も嬉しそうに揺れていた。

第 21 章 芳子との別れ

21 芳子との別れ

七月の始め、からっとしたさわやかな日が続いていた。杉本の家の中には和歌子の植えた小松菜と大根が育っていた。やはり食べられるものが一番だということに気づいたからだ。

夜になって食事も済み、皆がめいめいに好きなことをしていた時のことだ。一本の電話が鳴った。芳子からだ。和歌子は電話を娘に取り次いだ。

美香は明るく電話に出たが、急に心配そうな表情になって、「どうしたの？」と問いかける。少しの時間の会話の後に、美香は電話を切り、父と母に話した。

「芳子が今から家に来るって。芳子のお母さんと、お父さんも一緒に来るって」

「どうしたんだ」

「どうしたの」

杉本と和歌子は同時に声を上げた。

「うん。芳子はね。今まで聖書を学んでいることを親には黙っていたんだけど、夏の大会に毎日行きたいので、思い切って親に打ち明けたんですって。そしたら親が怒っちゃって。私から『コーヒーハウス』に誘われたって知って、私と私の親にも会って話すといって聞かないんですって」

「それで今から来るっていいのかい」と、大いにうろたえた杉本。

「まあ……片付けなくちゃ」と和歌子。

とりあえず杉本は依田純一に電話をして助けを求めた。

三十分後、芳子を乗せた車のライトが杉本の家を照らした。

「来たよ」と悟。さすがに緊張している様子だ。

悟、「二階に行ってなさい」と和歌子に促されて、しゅしゅ自分の部屋に上がっていく。

直樹、自ら進んで部屋に隠れる。

音楽イン……

杉本、外に出て、車の駐車を助ける。

気まずい雰囲気。

杉本、「どうぞ」と玄関のドアを開け、芳子の家族を招き入れる。

始めに芳子が入ってくる。次に憤慨した表情の芳子の母。最後に芳子の父。

父は大男だった。ドアをくぐるようにして入ってくる。落ち着いた表情をしている。

最後に入ってきた杉本は、その身の丈を見て、「江利山にも助けを求めたのだった」と後悔する様子。

リビングルームの中

美香は入ってくる芳子に抱きつく。心配そうな表情。

インコも心配そうな表情。

庭の犬は「クーン」と鳴いてうずくまる。

応接セットに座っている芳子の父と母と芳子。向いあう形で、杉本と美香。

和歌子はお茶の準備をしている。

熱帯魚も興味を持って水槽越しに見ている。

音楽アウト……

芳子の母が話し始めた。少し早口だが、ここには分かりやすく記す。

「お聞きになっていると思いますが、宅（たく）はいちおう、クリスチャンなんです。正直、あまり熱心なほうではありませんが、宅には宅の教育方針があります。芳子は、もちろん何を信じるかは自由ですが、まだ判断力のない未成年なんです。おたくの……杉本さんのご家族が信じている宗教に反対するつもりはありませんが、芳子には教えてほしくないのです。もし、芳子に変な……失礼、あの、ちゃんとしてない、とか、あまり良く思われていない宗教に入ってしまったら、ご先祖様にも顔向けができません」

「仏教派キリスト教徒かね」と、太縁メガネを人差し指で少し上に上げながら、芳子が茶々を入れる。

芳子の父は黙って、腕組みをしている。

依田純一が遅れてやって来たので、和歌子はテーブルの椅子を一つ置いて『どうぞ』と手で指し示した。

芳子の母はかまわずに話し続ける。

「芳子には、ちゃんとした大学にも行ってほしいと思っています。もう受験勉強も本格的にしなくてはならないし、塾にも通いさせたいし、時間もありません。今は、学生の本分である学業に専念する必要があるのではないのでしょうか。聞けば、杉本さんのご夫婦は、以前は学校の先生をなさっていたというし、分かっただけですよ。やはり勉強は……学校の勉強のことですけど、しっかりやっておかないと後で困りますよね。芳子は遊んでばかりで、温泉旅行だなんていって、しょっちゅう出かけてるし、邪馬台国がどうのって夢みたいなことばかり言ってるし、そろそろ本気になってもらわないといけません。私だって主人だって自分の娘のことは本当に愛しているのです。絶対に幸せになってほしいのです。娘のためだったら何だってしますよ」

芳子の父は腕組みをしながら大きくうなずいた。

依田純一は事情をすぐにのみ込んだようだ。皆の話の切れ目を見計らって話し始めた。

「芳子ちゃんは、今まで私たちの集会に通って、未成年の子どもたちが親に従順に従うことが、聖書の命令であることは知っていますね」

「はい」と芳子は素直にうなずいた。

依田は話を続ける。

「文語なのでちょっと読みにくいのですが、エペソ書というところには子供たちに対してははっきりとこのように命じています」と芳子の両親にも見える様に聖書を開いた。

子たる者よ、なんぢら主にありて両親に順へ、これ正しきことなり。『なんぢの父母を敬へ……然らば、なんぢ幸福を得、また、地の上に命長からん』 (エペソ書 第6章1節、3節 文語訳)

芳子の父はまた大きくうなずいた。杉本もうなずきたかったのだが、空気を読んで神妙な表情のままにいる。

依田は続ける。

「芳子ちゃん、この聖句の意味は分かりますよね。神様は、子供たちが親を尊敬して、従うことを求めておられます。反対に親たちには子供達を心から愛し、育てるようにと望んでおられます。芳子ちゃんのお父様とお母様のようにね」

芳子の母も、ここで大きくうなづいて何か話そうとしたが、芳子の父に制止された。

依田はなおも続ける。

「芳子ちゃんは、まだ未成年だから、親の決定にできる限り従う必要があります。もちろん、二十歳を過ぎたら何をしてもいい、というわけではありませんが……。今の芳子ちゃんの状況の場合は、どうする必要があると思いますか」

尋ねられた芳子は、

「親に従う必要があります。……集会にも行ってはいけないということですか」

と、逆に質問した。

「はい。その通りです。親の許しがないならば、です」

と依田は、きっぱりと答えた。

芳子も美香も考え込んだ。

杉本も「考える人」のポーズになっていた。

落ち着いて紅茶を一口すすってから依田は、なお続けた。

「芳子ちゃんのお父様とお母様も、芳子ちゃんが家で時々聖書を読むことには反対なさらないでしょう。学校の勉強をちゃんとしていれば、ですけどね。それに神様に祈って話しかけることを禁じたりなさらないと思います。これは誰も、禁じる権利を持っていないことです。……だから、今、芳子ちゃんがすべきことは何だと思いますか」

良く考えてから、芳子は答えた。

「分かりました。お父さんとお母さんに従います。学校の勉強もちゃんとします。集会には行けないけど、家で神様のことは忘れないように頑張ります」

芳子の母は念を押した。

「学校でも、美香さんと聖書の話はしないようにしてね」

美香と芳子は顔を見合わせた。

和歌子が小さなケーキを、お茶うけに出してきたが、芳子の父は立ち上がり、

「いや、今日はこれで失礼します。依田さん、杉本さん、ありがとうございました」

深く一礼すると、妻と娘をうながし、帰っていった。

杉本と和歌子は「ふー」と息を吐いて、ソファーと、テーブルの椅子に腰掛けて脱力した。
依田は、「おいとまします」と簡単に言って、帰っていった。

次の日、学校で顔を合わせた美香と芳子は、自分たちの状況が「アンとダイアナ」の状況に似ていることに気づいて、お互いを慰めた。

「ねえ、『腹心の友』の誓いをしようか」と美香が提案した。

「いいね。どっちがアン？」と芳子が乗ってきた。

「そうだな。やっぱり私がアン、と言いたいところだけど、私の髪の毛はダイアナみたいに『カラスのように黒くて』長いから、ダイアナでいいや。アンは譲るわ」

「ありがと。あたしの髪は少し茶色いから、まあ、赤毛ということで。……でもメガネはとらなくちゃね」
メガネを取った芳子は、長いまつげをした美人だった。

『太陽と月のあらん限り、我が腹心の友、杉本美香に忠実なることを、われ、おごそかに宣誓す』

『太陽と月のあらん限り、我が腹心の友、佐藤芳子に忠実なることを、われ、おごそかに宣誓す』

四年後、この二人がコンビを組み、九州にある、手話だけですべての集会が行われる『福岡手話コーヒーハウス』に移籍して、どたばたしながらも楽しい生活をするようになることは、まだ誰も知らない。

そしてまた、その二年後、佐藤芳子は我らが「北浦和コーヒーハウス」の、ろう者の「星」、青木武士と結婚することになるのだが、それもまだ、誰も知らない。本人も知らない。

22 スナフキン

八月の終わり頃、秋を感じる日差しが埼玉県に射していた。北浦和公園からは、夏休みの終わりを惜しむ子供達の叫ぶ声が『コーヒーハウス』の出窓のガラス越しに聞こえてきている。古い小山にある木々も風にゆれて騒いでいる。

日曜日の集会後、残っている人々は忙しそうに、それぞれの用事に追われていた。杉本の妻と子供たちは、夜七時からの特番「漫才天国」を見るために、早めに家に帰っていった。和歌子は「爆笑キング」のファンだ。時事ネタを織り込んだ、とぼけた掛け合いに、大声を出して笑う。ストレス解消にいいらしい。暇をもてあましていた杉本は、やはり暇そうに木製の大きなテーブルに座っている中沢タケルに目を留めた。いつも息子の悟や直樹と仲良くしてくれているお礼を述べようと、この「スナフキン」に近づいた。

中沢は椅子に腰を降ろして、テーブルに両肘をつき、手に持った小さな鏡のようなものをじっと見ていた。「中沢さん、何を見ているのですか」と杉本が声をかける。

中沢は杉本をチラッと見てから、声を出した。

「小さな長方形の鏡で
じっと自分の目を見ていると
僕は素直になって
ありのままの自分を見ることができる
愛したい 愛されたいと願っている
自分の魂を見ることができる

ボクが……私が、作った詩です。」

「いい詩ですね」と、ちょっと面食らった杉本は、それでも心から誉めた。「そうですか？ 本当ですか？」とタケルは嬉しそうな目になった。「杉本さんの子供たちは皆いい子たちですね。ボク……私は好きです」

タケルは三十過ぎの男である。念のために言うておく。タケルは自分のことを「ボク」と呼ばずに「わたし」と呼ぶように努力しているようだ。かわいいな
タケルくん

その日「スナフキン」中沢タケルと杉本空歩は仲良しになった。

中沢タケルは、驚いたことに、かつては教会の牧師だった。

宗派の運営する神学校を卒業し、二十代の若い頃、小さな教会で働いた。自分なりに聖書を深く研究し、イエス・キリストの生き方に心を打たれた。イエスのように生きたいという願いが、若くまじめな中沢タケルの胸に熱く宿っていた。イエスが、娼婦や収税人のような罪人たちと親しく交友し、癒（いや）し、教えたことが特に胸を打った。

中沢は自ら進んで、キャバレーや暴力団の事務所へと伝道に向った。脅かされたり、面白がられたりしながらも充実した日々を過ごしていた。時々、信徒の前で講話をする順番が回ってくることもあった。話し下手な中沢が手本にしたのは、名のある説教師たちの残した「説教集」だ。夢中になって読んだ。良い説教とされていたものには、古代の、キリスト以前に生きたギリシャ哲学者の言葉を引用したものが多い。ともすれば聖書よりもギリシャの哲学を熱くなって解説しているものもある。

そんな「説教集」を読み、翌日の講話の原稿を準備していた時のことだ。

「こんにちは」

開け放してあった窓越しに、小柄な、笑顔の男が声をかけてきた。

「こんにちは」と丁寧にお辞儀を返した中沢に、男は「お話の準備ですか」と問いかけた。「はい、そうです」と答えた中沢は、少し不安になった。そして、その不安は的中した。

その男は、『コーヒーハウス』の伝道者だったのだ。私たちはもう、その男の名前を知っている。依田純一だ。

彼らには耳を貸してはならない、あいさつさえしてはならないと、先輩たちから言われていた。中沢自身もまた、この得体の知れない「異端」に嫌悪を感じていた。

しかし、この日は、人の良さそうな伝道者の笑顔に、不思議と心を開いてしまった。依田が問いかけるままに、中沢は答えた。

「お話の主題は何ですか」

中沢は簡単に答えた……。

「どんな聖句を読まれるのですか」

中沢は、答えに窮した。まだ決めていなかった。

「その主題でしたらこんな聖句はいかがでしょう」

依田純一は手に持っていた聖書を開こうとしたが、思い直し、

「中沢さんの使っている聖書をお借りできますか」

と頼み、そちらの聖書を開いた。

一つ、また一つと、聖句を示すと、依田は簡単に、

「このイエスの言葉は最高ですね」

「この言葉もしびれますね」

「神様の言葉はすばらしいですね」

などと感想を加えた。

そのときのことを思い返し、中沢は杉本空歩に語った。

「依田兄弟は三十分ぐらいで二十以上の聖句を開きました。わ、ボ……私は、正直びっくりしました。こんな話し方をする人に初めて会ったからです。私の心は燃えていました。依田兄弟が聖書の意味をすっかり説き明かしてくれたような気持ちになりました……。依田兄弟はあの時、神の言葉を「剣」のように振っていたのですね。……ほんとに『ヨーダ強い』でした」

杉本の脳裏には、小さなおじさんのジェダイ・マスター、ヨーダが光線剣を右に左に振り回している様子が浮かび、なかなか消せなかった。

中沢は語り続ける。

「その日から毎週のように依田兄弟との話し合いは続きました。そして、とうとう教会をやめる決意を固めました」

「でも、簡単にはやめられなかったでしょう。世が世なら、火あぶりになるところですよね……」と、杉本は気楽に言ったが、中沢の顔を見て口をつぐんだ。

中沢タケルは唇を噛み締め、細い目をして答えた。

「火あぶりになったほうが、楽だったでしょう」

「スナフキン」は、とうとう大人の友達を持った。

この日から、この不思議な目をしたタケルと、杉本空歩は無二の親友になるのだった。

ソランはタケルから、小さな長方形の鏡を借りて、自分の両目を映してみた。愛したい愛されたいと願っている自分の魂を、たしかに見ることができた。

第 23 章 ナザレ人（びと）の休日

23 ナザレ人（びと）の休日

九月になった。夏の暑さはなかなか秋風前線に降伏しない。人々の目元には、たまった疲労が、披露されている、と「歴史家」のひょうきん森田さんだったら言うであろう。

しかし、私たちは、かの依田純一に目を向けよう。

依田の生活のための『仕事』は水道検針員だ。月曜日から金曜日まで朝の八時半からだいたいお昼過ぎまで働く。経済的に割りと効率の良い、この仕事に依田は満足していた。これまで彼は若い時から、いろいろなアルバイトの仕事をしてきた。新聞配達から始まって、牛乳配達、ガソリンスタンドの店員、刃物とぎや靴修理の技術を習得しようとしたこともあったし、かさ修理もやった。ちいさな継ぎ手とラジオペンチさえあれば今でも簡単に、折れたかさの骨を修理できる。換気扇清掃や風呂がま清掃もやった。新聞の集金は、お客さんの苦情処理がたいへんだった。交通誘導員の仕事は同僚からも運転手からも怒鳴られて苦労した……。貯金はできないが、自分ひとりだけの費用はなんとか賄（まかな）うことができてきた。

「コーヒーハウス」では、自分の生活を調整して、伝道活動に自分の精力と時間をつぎ込む人々を「ナザレ人（びと）」と呼ぶ。文語約聖書の中に出てくる言葉だ。古代の「ナザレ人」の誓いをした人は、ぶどう酒を飲まず髪のもも切らず質素な生活をして、神への奉仕を優先した。イエス・キリストが育った町として知られる町の名前も日本語では「ナザレ」だが、もともとのヘブル語の言葉は異なっている。

聖書の中で、有名なナザレ人には「力持ちサムソン」がいる。知っている人も多いただろう。「サムソンとデリラ」という映画になったこともある。

「コーヒーハウス」の人々が呼ぶ意味での、現代の「ナザレ人」になるには何の資格も要らない。必要なのは、月単位で三十時間以上あるいは五十時間以上を伝道活動に費やすという決意と、それを地元の「ハウス」の仲間に表明する、ということだけだ。仮に目標の時間に満たなくなってしまった場合でも何の罰則も無い。逆に、たとえ百時間を伝道に費やそうとも、発表されることもないし特に誉められることも無い。何しろ、誰がどれくらいの時間を伝道のために使ったかを他の誰も知らないからだ。つまりこれは完全に、自発的なもので、自分と神様との約束もしくは「誓約」とみなされている。この誓いをして、最低一ヶ月間の活動をする人の多くは、またこれをしたくなるという。学生は学校の休みを利用して申し込む人が多い。会社の仕事をしている人は年末年始やお盆休みや土曜日曜の休みの多い月などに自発的に申し込み、忙しく働く。

依田純一と「言語君」江利山は連続して毎月、ナザレ人をずっと続けている。他にも多くの女性たち、つまり姉妹たちは連続してナザレ人だ。ろう者の清瀬姉妹も、体を悪くしてできなくなるまでは、熱心なナザレ人だった。特に若い人々は、その青春をナザレ人として過ごすことを薦められている。

依田純一は、今日の午前中、少し遠い区域の水道検針をしている。バイクに乗って、荒川を越えたところに

ある、田舎の区域の家を一軒ずつ回る。地面の草に隠れていることの多いボックスを開けて、メーターの指針を読み、「ハンディ」と呼ばれる携帯用の機械に数字を打ち込み、出てきた「戸票」と呼ばれる小さな用紙をポストに入れるという簡単な作業だ。田舎の区域は家から家が離れているので、効率が悪い。しかし、依田は田舎の区域を回ることが好きだ。四季の自然の変化に、じかに触れられるからだ。効率の良いマンションや住宅街でもいろいろな発見があるが、やはり田舎がいい。反対に、いろいろな飲み屋などが立ち並ぶ繁華街の区域は苦手だ。夜の間誰かがメーターボックスの上に「胃の内容物」を吐き出している時などは、さすがの依田も顔をしかめてしまう。

でも、今日は田舎だ。天気も良い。バイクを置いて、なるべく歩こう。

最近、この「熱きロマンチスト」は、疲れやすくなってきたことに気づいていた。六十半ばの年には勝てないだろう。午前中の仕事を終えると、すっかり疲れて、家に帰ってから、しばらく横になっていなければならないことも多い。

だから今日は無理しないで、ゆっくり歩こう。午後の伝道の集合時間には間に合わないかもしれないが、仕方ない。若い兄弟たちがしっかりやってくれるから何の心配もいらない。

荒川の支流の一つでは、週の半ばだというのに多くの釣り人たちが、のんびり釣り糸をたれている。昼近くなると、まだまだ暑い。

そうだ、あのワンちゃんは元気かな。

いつも大歓迎して飛びついて来る犬のことを思い出した。これから回る家だ。そういえばさっきの家の「ちびすけ」は子どもの頃は安心して近づいてきたのに、最近は、自分を見ても、うなったり、ほえたりするようになっている。いじめられでもしたのだろうか。可哀想に。

依田は、弱い者いじめが大きらいだ。施設にいた子どもの頃に、優しいお母さんのような園長さんが読んでくれた「みにくいアヒルの子」は、幼き依田純ちゃんの愛読書になった。

みんな、いじめないで。いじめないで。かわいそう……。

最後に、みにくいアヒルの子は、それはそれは美しい白鳥になった。その絵は純ちゃんの目の中に焼きついている。よかった、よかった、ほんとによかった。

もう一つ忘れられない絵本があった。題名は忘れてしまったが、子どもが、ふざけて赤い金魚をじょうろの中に入れてそのまま、地面に埋めてしまうのだ。金魚はその夜、子どもの夢に出る。怖かった。恐ろしかった。そんなことをしちゃ、だめだ。純ちゃんは夜になると、しくしく泣いた。わけも無く泣いていた。そんな日がたくさんあった。

でも、そんな自分でも、同じ施設の女の子に、ちょっと意地悪をしたい気持ちになって、お遊戯のときに手をつながなかった。先生に叱られたけど意地になって手をつながなかった。女の子は泣いていた……。ごめんね。ごめんね。ほんとは君が好きだったんだよ。本当にごめんね。何であんなことをしてしまったのだろう。これは大人になった純一の、「罪」の原点となっている思い出だ。

どんなに良い人になりたいと思っけていても、ひどいことを言っけてしまったり、差別や意地悪を仕てしまう。自分のほうが偉いんだ、と見下げる目を仕てしまう。そんな自分に気づくたび、みにくいアヒルの子をいじめているんだ、この自分は！と思っけて悲しくなる。そして心の中で、子どものように、ごめんね、ごめんね、と何度もあやまる。

依田は今でも、虫が殺せない。ハエだっけて蚊だっけて、絶対に殺さない。だっけて可哀想じゃないか。死んでしまうんだよ。二度と戻っけてこないんだ。そんなことできない。

間違っけてアリを踏んで死なせ仕てしまうことがある。それはいつまでも依田の心に残っけてしまう。春の雨が降った水田近くの道路をバイクで走ることが、とても苦手だ。たくさんの小さなカエルが轢（ひ）かれて仕てしまう。考えただけで喉（のど）がからからになっけて仕てしまう。

施設で育った純ちゃんには、父の思い出はまったく無かった。それが自分の性格に大きな影を残していることに大人になっけてから気づいた。はじめは自分だけだと思っけていたが、ちゃんと父親のいる家庭に育った人だっけて、肩車を仕てくれる優しい父がいない人も多くいることを知った。

優しい父さんと優しい母が、ちゃんといっけてこそ家族でしょ？ アダムとエバは何といっけてを仕てくれたのだ。どうして天の父に背いたの。どうして生まれ仕てくる子供たちに悲しい思いをさせ仕てしまったの。どうして家族さえも悲しみの原因になっけて仕てしまうの？

こんないい天気の日なのに、何で自分はこんな小さな時の悲しかったことばかり思っけて仕てしまうのだろう。もっと明るいことを考えよう。そうだ、私は神様に会っけてんだ。そして愛するイエスといっけて、父に良く似た、大きな兄さん※に会っけてんだ。私だっけて、また帰れるさ。お父さんの肩の上にね。

※アリウ斯的考え方によれば、イエス・キリストは、神ご自身ではなく、神が一番初めに作られた「初子」です。つまり天使や人間を含めた家族の中の長男のような存在です。この「おっきい」兄さんは、愛する父の命（めい）を受け、他の人間の家族のために、自分の人間としての命を犠牲に仕てました。おかげで、神と「和解」する道が開けました。それだけでなく、教えや生き方を通して、父がどのような方であるかをはっきりと教っけてくれました。神はこの子に対する愛の表明を惜しみませんでした。それである意味、聖書は父と子の愛の物語とも言えます。依田純一は聖書をそのように読んでいます。

24 再び 家族の一致

十月になって、杉本空歩は決意した。その決意を日曜日の夕食後、家族に表明した。

「明日の月曜の夜八時から、家族みんなで『ファミリー・スタディ』を始めます」

家族の反応は意外なものだった。杉本は、おそらく家族は不平不満を口にするだろうと思っていたのだ。見たいテレビがあるというかもしれない、宿題があるからだめだというかもしれない、めんどくさいからヤダ、というかもしれないと予想していた。

しかし、

和歌子はこう言った。

「いいんじゃない。そろそろ、そうくると思っていたよ」

美香はこう言った。

「遅いよパパ。ハウスの家族はみんなやってるよ」

直樹はこう言った。

「いいんじゃないですか」

悟はこう言った。

「やっとクリスチャンの家族らしくなってきましたねえー」

インコはこう言った。

「おーいミズシマ、イッシュヨニ、イッシュヨニカエロー」

柴犬テリーは庭を走り回っていた。

「ハッ、ハッ、ハッ、イーネツ」

直樹は以前の建設ボランティアの時以来、時々『コーヒーハウス』の集會に顔を出すようになって、そのうちに高校生の兄弟に薦められて、一緒に「ホーム・スタディ」を始めていたのだ。もっとも、その高校生の兄弟の家、つまり「ホーム」に自転車で行って聖書の勉強をしてくるという意味だ。それ以外にも学校の勉強を教えてもらったり、ギターを弾いたりして、仲良くなっていた。

一大決心のうちの宣言を、あっさり受け入れられてしまって拍子抜けした杉本だったが、まあ、良かったと安堵した。

そして、次の日の夜。

八時になる前から、家族は珍しく緊張していた。というより、パパは何をしでかすのだろうと、楽しみにしていたというのが本当だろう。八時には全員がリビングルームの応接セットに勢ぞろいした。杉本は張り切って宣言した。

「ごほん。では、ただいまより、杉本家の、第一回『ファミリー・スタディ』を開催いたします」

家族はいきなり、しらけた。

「それは無いでしょ」

「運動会かよっ」

「パパおもしろい」

「先生みたい」

「おーい水島」

和歌子が助け舟を出す。

「普通はまず、お祈りでしょ」

「分かってるよ、今しようと思っていたんだ」

と子どもの言い訳のようなことを言ってから、「では、お祈りします」と述べ、短い祈りをした。

家族はくすくす笑ったり、互いを肘でつついたりしている。

面目を失った感じの杉本だが、準備しておいたカリキュラムに従い、第一日目の「ファミリー・スタディ」は始まった。

杉本は学校の先生時代から、勉強を面白く進めるのは得意だ。この日から「涙あり笑いあり、歌あり劇あり、手話あり、工作ありお絵描きあり」の家族の聖書研究が続いていくのだが、初日の今日は、ちょっと不満が出た。杉本が、例の得意の呪文覚えを披露したからだ。

「まず、聖書の書名を全部、諳(そら)で言える人？」と杉本は無理な質問をした。

「えー、まだ無理だよ」と直樹。

もちろん、杉本だって馬鹿じゃない。その反応は予想していた。

「そうですね。ではこれは宿題とします。毎回の『ファミリー・スタディ』で、覚えることができたかどうか尋ねますので、覚えられた人から言ってもらいます。一番初めに覚えた人には、ごほうびも出ます」

「えー、ごほうびって何？」と悟。

杉本は実はまだ、これは考えていなかったのに、

「それは後のお楽しみですよ」と言ってその場を、何とかやり過ごした。

美香が言った。

「じゃあ、パパはもう覚えたの」

その質問も予想していた。

杉本は昨日の晩も、何回も繰り返して覚えていたのだ。

「では、模範を示します。覚えやすいように、少し書名を短く略しています」と言って早口で呪文を唱えだした。

皆は聖書の目次を開き、目で追う。

「創、出、レビ、民、申命記、ヨシュア、

士師、ルツ、サムエル前・後、列王前・後、歴代前・後、

エズラ、ネヘミヤ、エステル、ヨブ、

詩篇、箴言、伝道の書、雅歌、

イザヤ、エレミヤ、哀歌、エゼキエル、ダニエル、

ホセア、ヨエル、アモス、……

ヨナ、ミカ、ナホム、

ハバクク、ゼパニヤ、

ハガイ、ゼカリヤ、マラキ」

得意になって旧約聖書の書名を、「お題目」を唱えるように続けたが……、

「ぶぶー」と家族全員の押すブザーが鳴る。 残念！

「オバデヤ書が抜けた！」

旧約聖書の「預言書」でつまずいてしまった。「オバデヤ書」がどこかへ行ってしまったのだ。再び面目を失ってしまった父は、「あれー」と叫んで止まった。

「パパも宿題やらなくちゃね」

がっくりと肩を落とす父。

「でも『御霊（みたま）の実（み）』は覚えたぞ」と気を取り直す父。

まあ、大相撲だって初日には波乱が起きることもあるさ。

この日の『ファミリー・スタディ』は「御霊の実」と「ダニエルの三人の友」の名前を覚えて終了した。「御霊の実」は『どんぐりコロコロ』の節で覚えやすくして歌い、輪唱もした。みんなで大きくブドウの実を九つ描いてその中に「愛・喜び・平和……」と書いて、壁に貼った。

御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、仁愛（じあい）、善意、忠実、柔和、自制であって……

（ガラテヤ書 第5章22、23節 口語訳）

シャデラク・メシャク・アベデネゴ※

（ダニエル書 第3章12節 口語訳）

※ダニエル書の中で、異国の王が立てた偶像を、断固として拝もうとしなかった若者三人の名前。

25 ためらい

秋が深まる十一月になった。杉本はこの季節、故郷の長野県の紅葉を思い出す。紅葉は山から始まって麓に降りてくる。麓のほうではだいたい十一月ぐらいが紅葉の盛りになる。裏山は、赤や黄色やいろいろな色になって見る人の目を楽しませてくれる。とてもきれいだ。この季節から冬にかけては木々の葉が落ちるので、実は山に登りやすい。

子どものころ、「裏山」に一人で上ることが好きだった。たった一人なのに「裏山探検団」と名づけているようなルートを探して上った。麓からよく見える山の頂に、持っていったレジャーシートを大きな旗に見立てて、立ててくるのだ。ほんとは、そんなことをしてはいけないのだが、子供の冒険心には勝てなかった。ひそかに立ててきては、麓から、遠くにはためく様子を眺めては悦に入っていた。お気に入りの岩場の上で、遠くの景色を眺めることが毎回の楽しみだ。下からは砂場のように見える場所が、実際に行ってみると大きな石がごつごつしている「がれ場」であることを発見して納得してみたりもした。

山に勝手に名前をつけることも好きだった。「太郎」「次郎」「小次郎」「坊ちゃん」「三四郎」「大将」などと、地図では名前のない、小さな頂にも勝手に名前をつけて呼んだ。高いところまで登らないと見えない、さらに高い頂もある。いわば「幻の山」だ。こうした自分だけの山たちが、千曲川を越えた遠いところからでも見えることがある。そんな時は喜んで、「おーい、三四郎、元気か」などと呼びかけた。川向こうの平地から「幻の山」の霞んだ頂が見えるスポットを偶然発見した時は興奮した。

長野は縦に長い県なので、場所によってもだいぶ違うが、中北部のほうは冬の寒さがとてもきつい。北海道よりも寒いという人もいる。実際の温度は北海道のほうが寒いのだが、特に古い民家などは建て方が隙間だらけで、とにかく寒い。掘り火燧に潜りこみたくなる。子どもの頃は本当に潜りこんだので、ズボンやシャツに焦げ目をつけることになった。焼けどをしたこともたくさんある。昔は炭を燃やしていたのだ。金網を上にかぶせるように置いてあるのだが、注意しないとやっぱり焦げる。

長野県民の特質なのだろうか、杉本には頑固なところがある。納得しないと先へ進めない。そんな性質が、杉本の「霊的な」進歩を妨げた。

「コーヒーハウス」は一年に二回、大きな集まりである大会を開くことは前にも説明した。毎回の大会では、今まで聖書を学んできて、クリスチャンになることを決意した人たちが、バプテスマを受ける。バプテスマとは、ギリシャ語で「浸ける」とか「浸す」という意味がある。イエス・キリストもヨルダン川で、水の中に全身を一瞬の間、浸されるという方法でバプテスマを受けた。今日の日本では、きれいな川が近くにない場合が多いので、自分たちで組み立て式の小さなプールを作る。時には公共のプールや開店前のお風呂屋さんを借りて、バプテスマが行われることもある。希望者は肌の露出しない慎み深い水着を着る。女性の場合はさらにTシャツなどを着ることもある。

聖書を学び始めた人の中には、すぐに信仰を持ち半年ぐらいでバプテスマを受ける人も多い。これまで二

年近くも学び、集会にも毎週出席してきた杉本も、そろそろバプテスマを受けたいと考え始めていた。「ハウス」の兄弟姉妹たちも、「杉本さん、そろそろでしょう？」とか『杉本兄弟』と、早く呼びたいですねなどと言うようになってきた。

杉本は、ためらっていた。

「援助者」の依田には、今のところ相談しなかった。たまには自分でこの信仰の問題を解決しようと意地になっていたところもある。依田は常日頃「あわてなくてもいいですよ」と言っていた。

仲良くなって集会後にも話し合うことの多くなった「スナフキン」には悩みを打ち明けた。年齢が近いという気安さもある。中沢タケルはよく理解してくれた。彼なりの励まし方があった。

「ボクが若い頃の愛読書は、『ロビンソン漂流記』でした。無人島に漂着したロビンソン・クルーソーは、実は、信仰上の葛藤に苦しんでいたのです。自分の信仰が真正なものかどうか、じっくり考えることは良いことだと思います。一人ぼっちのロビンソンは時間だけはたっぷりあったのですからね」

杉本もこの物語を読んでみた。一般的なイメージとはずいぶん違う物語に驚き、確かに自分の心の葛藤と似ていると思った。

杉本は何をそんなに悩んでいたのか。

杉本は自分の心に問いかける。

お前は本当に神を信じているのか

お前は本当に神を愛しているのか

神が確かに存在していることは疑いようがない。

聖書が真理を教えていることは疑いようがない。

「コーヒーハウス」の教えが確かに聖書に適(かな)っていることも疑いようがない。

頭では完全に納得している。しかし、心が、心が、前に進まない。

杉本には自分の心をきちんと腑分けして理解することはできなかった。しかし、仮にそれができたとしても前へ進めないことに変わりはないだろう。

杉本の日常は、少しも変わらなかったが、心は袋小路をさまよっていた。

26 地獄の火と、三位一体

こゝすぎて かなしみの都へ
こゝすぎて 永久（とわ）のなやみに
こゝすぎて ほろびの民へ

ダンテの書いた「神曲」という物語の中に出てくる「地獄の門」には、そのように書かれている。

いつもの「コーヒータイム」に杉本の長男の直樹が、「言語君」江利山に質問した。
「あの、『エロイム・エッサム』ってどんな意味があるのですか」

江利山「軍曹」は答える。

「ああ、あの悪魔くんの呪文だね。分かりやすく言うと、エロイムというのはヘブライ語の『神』を表す言葉『エローヒム』から取られているんだ。エッサムというのは、やはりヘブライ語で『炎』とか、場合によっては『悪魔』を意味するかもしれないな。だから全体としての意味はこんな風になる。僕のオリジナル訳だけどね。

『地獄の炎を司る神なる悪魔よ』

どう？ なかなか良いでしょ？ 良い子は使わないでね」

少し得意気な江利山に、杉本の末の息子の悟が質問した。

「じゃあ、テクマク・マヤコンは？」

（テクマクマヤコン、テクマクマヤコン、アッコちゃんにな～れ）

「えっ、……そ、それは……。う～、ヤラレタ！」

軍曹は戦死した。

秘密の「トットちゃん」は、ガッツポーズを作った。

「歴史博士」の森田が反撃に出る。

「地獄の炎とか、地獄の責め苦という教えは、歴史的には、『魂の不滅』を教える異教からギリシャ哲学※を経て、イエスの死後にキリスト教に取り入れられるようになりました。この教えは、中世の僧職者たちが、異端とみなす人々を生きのまま火で焼き殺すことに対しての口実にもなったのです。神が死後の世界で悪人を火で焼かれるのだから、今、不届きな教えを広める異端者どもを焼き殺しても問題ない、ということなのですね」

皆は顔をしかめた。「ひどい」

※特にプラトン哲学は「靈魂不滅」「三位一体」を教えていて、後にキリスト教に大きな影響を与えた。
新ブリタニカ百科事典……『西暦2世紀の半ば以降、多少ともギリシャ哲学を学んだクリスチャンたちは、

その哲学の用語で自分たちの信仰を言い表す必要を感じるようになった。……彼らに最もよく合った哲学はプラトン主義だった』

森田の説明は、悟にとっては難しすぎたようだ。いつの間にかどこかへ姿を消してしまった。さすがに戦術を心得ている。

ここで、依田純一が重すぎるテーマを投げかけた。

「皆さん、地獄の責め苦の教えと、三位一体の教えでは、どちらの方がひどい教えだと思いますか？」

その場にいた皆は、眉間にしわを作って考え込んだ。こんな質問をする人は、世界にも十人ぐらいしかいないだろう。

杉本の長女の美香が尋ねた。

「私、まだ三位一体の教えがよく分からないんですけど」

元牧師の「コーヒーマスター」中沢タケルが説明した。

「はい、み、美香…ちゃん。この教えは人間の理性では全部理解することはできないので、考えすぎないようにと言われるのですが…父なる神つまりエホバと、子なる神つまりイエスと、聖霊なる神が、別々の「以格（いかく）」というか、人格として現れるのですが、三つの神ではなく一つの神なのです。本質は同じで同等ですが、人々にご自分を表される時は三つの「位格」、つまり「ペルソナ」として現れる、というものです」

「さすがミステリー（奥義）だ。分かりにくい」と江利山が口を挟む。

中沢は続ける。

「カトリックの有名な聖人の一人は、三つ葉のクローバーに似た植物を用いて、人々に分かりやすく教えたと言われてます」

三つ葉のクローバーですか

なるほど良い例えですね

形がきれいだな

一同は感心してしまった。

どうしよう。

こんな時、悟がいたら、きっとこんな風に口を挟むだろう

「四葉のクローバーだったら四位一体だね」

悟はどこだ？ 戻ってきて！

杉本空歩が話し始める。

「葉っぱの数は、いろいろありますよね」

そうだ。さすが父親だ。

「二つ葉も可愛い形だし、楓なんか五つくらいに分かれていてもきれいですね。イチヨウは……ちょっとや

やこしいな。二つかな」

「ヤツデは八つで。ははは」と、森田も加わる。

「ヒトデは……違うか」と、杉本の息子の直樹が思わず加わった。

依田純一が説明を加えた。

「イエス・キリストは、ご自分をぶどうの木にたとえた時に、『あなた方は枝です』と言われて、ご自分と弟子たちの関係を表したことがありましたね。一本の幹にたくさんの枝が繋がっていることは誰でも知っていることでした。それはイエスと弟子たちの一致を表す例えでした。一本の茎に葉が三枚ついているとしても、形はきれいですが、それだけでは三位一体という不思議な教えを説明することはできないでしょうね。イエスは確かに『父と私は一つです』と話したことがありますが、その話の続きの中で、『あなたと私が一つであるように、弟子たちも一つでありますように』と神に祈っています。つまり一致しますように、ということですね。もちろん、『父は私よりも偉大です』と言われてたり、尊敬する父に従う子どものように祈り、悩みを打ち明けたりしています」

元牧師のスナフキンが答える。

「分かりにくいですが、人間イエスは神よりも低かったけれど、神としてのイエスは父と同等であるともいわれます。……そもそも、このようにして、理解しようと考えること自体が、間違いなんだと言われていきます」

正義先生「言語君」が一矢を放つ。

「考えるな、というのが腹が立つね。そもそもこの果てしない宇宙を作った全能の神を、完全に理解することは、僕らの頭ではできないことなんだから、このうえさらに解けないミステリーを突きつけられても、僕らの心は神から離れていくばかりだよ。僕の知っている神は、そんな理由（わけ）の分からない姿はしていないな。顔が三つあるなんて化け物だよ」

美香は、パンフレットの挿絵にあった、三位一体の神を表すとされる像の姿を思い出した。確かに、正面を向いた顔の左目と右目を、それぞれ共有する左右の顔が二つ付いている。

「こわいわ。どの顔と話したらいいのかしら」

「言語君」は続ける。

「だいたい、父と子はもともと別の存在だ。父と子の例えで三位一体を説明することには無理があるよ。神が、『父と子』というイメージを教えてくれていることには、ちゃんと理由があるはずでしょう」

本田貴美は「はい、和歌ちゃん」といって和歌子に紅茶を渡して、並んで座っている。

二人は本当に双子のように見える。

江利山の妻、亜矢子が丸い目をぐるりと回しながら参戦する。

「せめて、一番分かりにくい『聖霊なる神』を抜かして、父と子だけにしたらいいのに。なぜそうしないのかしら。二位一体というのでしょうか。二位（にみ）とは発音しないかも知れないけど」

スナフキン・タケルが援護に回る。

『三位一体』という考えも『魂の不滅』の教えと同じように、古代ギリシャのプラトン哲学を借りてきたの
かもしれません。プラトン哲学は三位一体を教えていました。キリストの死後、この人気のある哲学でキ
リスト教の教えを説明しようとした初期の教父たちがたくさんいます。ギリシャ哲学にかぶれた人たちが、
たくさんいましたから、受けが良かったのです」

「Wind is blowing from the Aegean. ……だな」と言語君が節をつけて言った。

あっ、ジュディ・オングの歌だ、と杉本には分かった。「魅せられて」だ。

たまたま「歴史家」が突入する。

『風はエーゲ海から吹いている』、ですな。私はこんな詩を作ってみましたよ。

※ギリシャの国より吹き寄せし
ヘッレニズムの大風に
微動だにせず屹立（きつりつ）す
バイブルハウスの灯台の
はるけき光に導かれ
波風高く越えてゆく
舟人らの雄たけびを
耳あるものは聞くがよし
……」

※森田が作った詩。「ギリシャで始まったヘレニズム文明の、人間中心的な思想が、大風のように世界中
を席卷しているが、聖書という灯台の光に導かれて、我らは神を賛美する道を行く」という気持ちが込めら
れている。

森田の調子外れの自作の詩は、まだまだ続くようだったが、それをさえぎって、青木武士が珍しく議論に加
わった。両の手で手話を表しながら話す。

「あの、もし、三位一体が、本当だ、としても、神が、愛の神で、ある、ならば、そんなに悪くは、ない、の
ではないでしょうか？」

議論がやっと本題へ戻ってきた。

手話を読み取った、益田みち子が声を出す。

「三位一体は間違いだと思いますけど、それでも愛の神であるのならば、地獄で人々を火で焼くような神よ
りも、ましではないでしょうか？ 自分が作った人間が自分の思い通りに動かないからって、いつまでも
苦しめるとしたら愛の神じゃない。残酷すぎる。『だったら初めから作らないで！』ということになります
よね」

みち子は中途失聴者だ。十年ほど前から急に耳が聞こえなくなってしまった。自分の声も聞こえないが、
健聴者とほとんど変わらずに話すことができる。みち子は背が高く、髪型はいつも短めにしている。その
ボーイッシュな姿は、若い頃に宝塚歌劇団で男役をしていたような雰囲気だ。隣には娘の貴代がおとなし

く座ってニコニコして話を聞いている。背の高さと顔は母親譲りだが、普段の話し方は、小さな子どもが甘え声を出すような、かわいい声だ。声帯模写の森田直子が、そのまねをしながら二人で話していると、貴代が二人いるみたいに聞こえる。

依田純一が話を受け取る。簡単な手話も交えている。

「私もそう思います。それで、三位一体が正しい、つまり神とイエスが同じだということを前提にして聖書を読んでみたのです。そうすると、私の好きな聖句で、み子のバプテスマを見て、神が思わず声を出すところが、まるで一人芝居のように見えてきました。み子が血の汗を流して、天の父に祈るところも一人二役なのだと思うと、少し、しらけた気持ちになってしまいました。そのようなところが、あまりにも多くて、私は耐えられませんでした。父と子のすばらしい愛のつながりが、不思議な自己愛に変化してしまうのです。神の愛の大きさがしぼんでしまうのです。聖書を読んでも、何とというか、雑音が響いていて、ピュアな気持ちになれないのです。真理はピュアなものだと思うのです」

依田は珍しく英語の言葉を使った。ピュアだ。

「なるほど。さすが純ちゃん、考えましたね。しかし、三位一体派からは、それは未開のバルバロス（異邦人）の限界だと言われそうだな」と江利山が、人事のように言った。

「まだまだだな」と益田貴代が可愛い声で言った。

すかさず森田直子が声真似をして続いた。

「まだまだだな」

「ふーん。よく考えましたね。依田兄弟」と、珍しくまじめな森田だ。

「じゃあ、三位一体のほうが地獄の教えよりも悪いということですか」と、これも本気の直樹だ。熱くなっている。

ちなみに、五年後、直樹は「炎のナザレ人（びと）」と呼ばれるようになる。自称だが。

また、そのさわやかな笑顔のために「若大将」とも呼ばれるようになる。これは自称ではない。かなりもてる若者になるのだ。

「いや、どちらが悪いかと言うのは、考えを刺激するための質問で、正解があるわけではありません。でも、神をナルシストのようにしてしまう三位一体の教えは、かなり冒とく的な教えといえるのではないのでしょうか。父も子もこの教えを喜んでいるとは、とても思えません。そのように思います。そのように感じます。それに江利山兄弟が言ってくださったように、考える頭を私たちに与えてくださった神が、私たちに『考えるな』と言うとは、それこそ考えられませんね」

と言ってから、依田は、自分の言葉に自分で笑い始めた。なかなか笑いは止まらなかった。

突然、「トットちゃん」悟が現れ、カンフーの達人のジェスチャー付きで叫んだ。

「ドン、ティンク、フィィール」（考えるな、感じる）

「こら、悟！」と和歌子が本気で怒った。

さすがの悟も恐怖に震えた。

一番強いのは、ビッグ・ママだった。

かくして、『コーヒーハウス』の、考えるクリスチャンたちの熱い夜は更けていく。
と言ってもまだ夜の六時だ。暗くなるのが早い。
急にお腹が空いてきた杉本空歩は、家族をせきたたて家路に着くのだった。

27 道の曲がり角

梅雨に入り、じめじめとした季節が続いていた。庭のあじさいの花はすっかり色づいてきた。カタツムリがたくさん、庭の草木の葉に白い筋をつけている。

いつものホーム・スタディが終わると、依田純一は、熱帯魚の水槽の中に小さなカエルが、何匹か泳いでいるのを見つけた。

「悟くん、このカエルは悟君が捕まえたのですか？」

「うん。そう、……です」と、食卓テーブルで本をよんでいた悟が答える。

「はい、でしょ。悟」と母。

「はい、です」と悟。

「このままではカエルがおぼれてしまうかもしれませんね」

と、心優しき依田は心配になっている。

「えっ、カエルもおぼれるの？」

「ええ。私も子どもの頃には知らなくてね。空き缶の中に、捕まえたカエルを入れておいたのですが、次の日になると、みな死んでしまったのです。どうしてだろうと考えて、やっと気づきました。可哀想なことをしてしまいました」

「ふーん。そうなんだ」悟はどうしたら良いのか考えている。

「何か、カエルが乗っかれるものを入れてあげたほうがいいな」と父も知恵をしぼる。

「水に浮く水草があればいいですね」と依田も考える。

「とりあえず、あじさいの葉っぱでも浮かべておいたらどうかしら」

と母が良い提案をした。一件落着だ、とりあえず。

悟はすぐに、庭に出て行って、葉を何枚か取ってきた。水槽の中に浮かべると、水の流れにのって舟のように回りだしたが、すぐに水槽の角のところで止まった。泳ぎ着かれたカエルたちがなんとかかよじ登ってきた。

「ノアの箱舟だね」

美香と直樹も見守っていた。

エンゼル・フィッシュとグッピーは自分たちの世界にも異変が起きていることに気づいた。

カエルの無事確かめた依田純一は、

「良かった。では、おいとまします」と言って雨の中をバイクに乗って帰っていった。

クッキー・クッカーは、

「おーいミズシマ、イッシュヨニ、ニッポンエ、カエロー」と呼び掛けた。

柴犬テリーは、いつまでも後姿を見つめていた。

依田の「おいとまします」はこの家で、これまでに何回、杉本の家族に聞かれたのだろうか……。今夜の「おいとまします」は、最後になった。

依田純一は病院のベッドに横になっていた。

このところ、いつもに増して疲れやすく体の調子が良くなかったのだが、胃の痛みが急に強くなり検査のために病院を受診した。詳しい検査をしたのち、医師から胃ガンを宣告された。かなり進んだものらしい。依田はもともと痩せていたが、さらに体重が落ちて頬もこけてきている。

ベッドの枕元には、愛用の聖書のほかに、読み古した二冊の本が置いてある。「ハイジ」と「そばかすの少年」だ。

見舞いに来た杉本と和歌子に、依田はこのように話した。

「この本は、昔、共に伝道活動に励んだ友にいただいたものです。私は大人になってからは、あまり……聖書のほかには、本を読まないのですが、この本たちは何度も読み返してきました。ハイジの物語は信仰の物語なのです。ハイジに出会ったおかげで、山のおじいさんも人嫌いが治って、昔の友たちの待つ教会に再び通い始めます。自分の娘を亡くしてしまっって信仰を失いかけていたクララのお医者さんも、ハイジを娘のように思い、立ち直ります。ペーターのおばあさんだって、ハイジと会うのが大の楽しみで、そのことを神様に感謝するようになります。アルプスの山が、夕日で赤く染まる情景がいつも目に浮かびます。お日様が山々に、さよならを言っているのですね……。ハイジが寝ている天井裏の部屋も大好きです。私もハイジと一緒に、干草のベッドの上で、窓から木々の歌を聴いたり、星の瞬きを眺めたりしました。

そばかすの少年も……孤児なのですね。森の番人の仕事をしながら、だんだん野鳥たちと親しくなって、鳥たちも少年に心を許して、恐れをなくして寄って来たり呼びかけたりするのです。本当に心のきれいな少年なのです。私もいつか、こんな生活がしたいと思いながら生きてきました」

「共に伝道した友だちは、今はどうしているのですか」と杉本は尋ねた。

「素敵な姉妹と結婚して、今は東北のほうで、夫婦で頑張っていますよ」

「依田さんは、結婚しようとは思わなかったのですか」と和歌子が尋ねた。

「好きになった姉妹がいました。でも私はなかなか言い出せなかったのです……」

和歌子はこれ以上聞き出すことはできないな、と思い、口をつぐんだ。

十日後、ジュンは天の父のみ手の中で目を閉じた。

ジュンは確かに愛されていた。

依田の葬式は、市民会館の小ホールを借りて行われた。「北浦和ハウス」の皆のほかに、近隣の「ハウス」の兄弟姉妹たちが駆けつけた。仙台からも、依田の昔の仲間が数人、一台の車に乗り合わせてやってきた。その中には、依田と若き日々を共に過ごした一組の老夫婦もいた。そのほかにも、かつて依田が数年の間、伝道活動をして過ごした、いくつかの地方から、友人たちが駆けつけてきた。三百人くらいの出席者になった。

「葬式の話」が半時間ほど短く話された。身寄りのない孤児であった依田の、神を捜し求めた歩みが振り返

られ、将来の復活※を心待ちにできることが語られた。会場には装飾のため、一つの花瓶に飾られた花が置かれたが、そのほかには何も無かった。依田の写真もなかった。会場にいっぱいになっていたのは、いつまでも続く、依田の死を惜しむ友たちの静かな語らいと、涙を乾かした後の落ち着いた微笑みだった。

※復活……聖書が差し伸べている希望。「魂の不滅」の教理によって追いやられてしまったが、イエスや弟子たちは確かに復活を信じていた。ヨハネ伝第5章28、29節。コリント後書第1章9節。など

小ホールは二階にあった。その外のロビーから日本庭園が見下ろせる。

杉本ソランと中沢タケルは並んで立って、庭園を眺めている。ヨーダの愛弟子だった二人だ。

二人の胸には依田に対する深い愛情が宿っていた。

二人は、やがて「背中を合わせて」敵と戦う、信仰の「戦場」の同志となることを予感していた。

この日から五年後に杉本空歩は親友の中沢タケルから、天地がひっくり返るほどの打ち明け話を聞くことになる。賢明な読者のみなさんは、もう見当がついているかもしれない。

「僕の、この大きな手には、小さな手が、握られています。お父さん……娘さんの……美香さんとお、……………」

次の日、杉本と和歌子は、依田が住んでいたアパートの部屋の片付けにやってきた。

古い造りの建物だった。一階に二部屋、二階に二部屋があるだけの小さなアパートだ。

二階へ上がる階段の下に、依田のバイクがそのまま置いてあった。

「このバイクは自分がもらおう。自分も伝道活動を始めよう」と杉本は考えていた。

依田の部屋は二階にあった。杉本は以前に一度だけ来たことがあった。その時は「何もない部屋だな。自分もこんな生活がしたいな」と思った。

あらためて見る部屋の中は、やはり何もなかった。

正確に描写しよう。

ドアを開けるとすぐ左側に、水道の蛇口がついた、小さな流しがあり、すぐ隣に、小さなやかんが置かれたガスコンロが一つ置いてある。小さな鍋が二つ、壁に打ち付けられた釘にかけられていた。

右側にはトイレと風呂場がある。部屋は、小さな、靴を数足置くだけの玄関も含めて六畳くらいの広さだ。窓は南を向いていたので、日当りはよさそうだ。部屋の中にあるものは、小さな本棚と小さな座卓。学習用の電気スタンドがその上にある。その脇には大きめの座布団が一つ。腰の高さほどの小さなタンスが一つ。伝道用の小さな鞆。集会用のドクターバッグ。これは古びているが、元は高価なもののような。衣類と布団は押入れの中にあった。小さな本棚に置かれていたのは十冊くらいの、いろいろな翻訳の日本語の聖書だ。辞書のようなものは二冊ほどあるだけだ。本棚には、他にも時計とオルゴールが置かれていた。オルゴールのふたを開けると、小さな音でクラシックのメロディーが流れた。

「依田兄弟は、この部屋で、聖書の奏でる交響曲を聴いてたんだな」

と杉本は一人ごとのように言った。

依田は時々、このように言っていた。

……聖書の言葉を理解するためには、辞書はあまり必要ではありません。いくつかの種類の日語訳を読み比べれば、言葉の意味は、ほぼつかめます。大切なのは、その言葉が語られた状況を、頭にはっきりと描くことです……

依田は、きっと子ども時代のイエスにも頻繁に会っていたのかも知れない。自分も子どもになり、大親友として、子どもらしい大冒険をしていたのだろう。

……「み言葉」聖書は一つの交響曲のようです。創世記の初めの三章で、天地創造のゆっくりとした壮大なテーマや、エデンでの明るく楽しいテーマ、反抗と罪がもたらす重く波乱に満ちたテーマが奏でられます。それらのテーマが、さまざまな変奏で、出エジプト・荒野の放浪を経て、ひとまず申命記でまとめられます。次に、勢いよく約束の地へ移動して、裁き人や王たちの時代の祝福と災いのテーマが交錯します。中ほどではやや難解なヨブ記の変奏の後に、牧歌的な、感情の素直な表れとしての詩篇の歌が歌われます。私は詩篇が大好きです。その後、大小の預言者たちが、時に雷のように、時に優しい母のように語ります。そして、いよいよ主人公の登場です。沸き立つような、活力に満ちたリズムでそれは進みます。そして使徒たちの、ピチカートで爪弾くような、手紙へと続き、最終章の大団円である黙示録の、ハレルヤコーラスへとなだれ込み、明るい希望を放射して、終わります……

和歌子は杉本の言葉を受けて、

「依田さんは、小沢征爾（せいじ）さんみたいに指揮をしていたのかな」と口にした。

杉本の脳裏に、白くなった髪を振り乱して、拳を握りながら指揮をしている依田純一の姿が浮かんだ。

「僕の音楽修行は、まだ始まったばかりだな」と杉本は声に出した。

タンスの引き出しを開けると、クッキーの缶箱があった。ふたが少し固かったので和歌子が力を込めると、開いた拍子に中の物が引き出しの中に散らばった。大切にしまわれていた手紙や小物たちだった。小物の中には、とても小さな良くできた短剣のように見えるペンダント、プラスチックの大きなダイヤモンド、いろいろの色の小さなタイルが数枚、五センチくらいの小さな棒（手品師が使うスティックを小さくしたようなもの）があった。この棒を見た瞬間、杉本は、「如意棒（にょいぼう）だ」と直感した。杉本も子どものころ、道で拾った小さな棒を、「孫悟空」が使う「如意棒」に見立てて、大きくしたり小さくしたりして（もちろん想像の中で）雲に乗って敵と戦ったことがあったからだ。施設の庭で、孫悟空になって走り回っているジュンちゃんが見えた。

和歌子は

プラスチックのダイヤを見て

誰かにもらったのかしら

とつぶやき

タイルを手にとって

子どもの時は宝物のように思えたのよね

と頬に当てて懐かしんだ

タンスの下の方の引き出しには、使い古したり、着古したりした衣類や襟巻きなどが仕舞われていた。

和歌子が《あっ》と声を出した
これは私が差し上げた手袋だわ
穴が開いてるけど
きれいに洗って
とってあるのね

依田は友人たちからプレゼントされたものを大事に使っていたが、古びて使えなくなったものは、大切に仕舞っておいたようだ。

依田さんらしいわね
和歌子はくすっと笑った

杉本と和歌子は無意識に手をつないだ。窓から見える青空を見ながら、しばらく黙っていた。二人の耳にも交響曲が流れ始めていた。

杉本は
この人も、いい人だし……
と心の中でつぶやいた

タンスの引き出しの中の小さな短剣のペンダントが、きらっと光ったような気がしたが、もうどこにも無くなっていた。

28 最後の疑問

依田純一が亡くなってから二ヶ月たった。杉本の悩める心もだいぶ落ち着いてきたようだ。もう一つの、切実な疑問を残してはいたが。

教材販売の会社の仕事で、外周りに出ることがある。杉本は今、電車のつり革に手をかけて、朝からの曇り空を見つめている。雲に切れ間ができて、太陽が一筋の光線を描いた。

『あっ、チンダル現象だ』と杉本は思った。

杉本が高校の化学の授業で習ったことによると、チンダル現象とは、空気や水の中にある小さな粒子に光が当たるときに筋のようになって見える自然現象のことだ。

杉本が、新妻の和歌子との新婚旅行で沖縄を旅した時、忘れられないこの現象に出会ったことがあった。訳せば「南の崖」という意味になる名前のホテルに宿泊した。名前の通り、沖縄の南部の端にある高級ホテルだ。それは一月一日の朝だった。宿泊たちの幾らかは海から昇る初日の出を眺めようと、まだ暗いうちに、朝食会場にもなっているレストランに集まった。今日は特別に朝早くから開いている。うまくいけば、南東側の広いガラス窓越しに、美しい日の出と朝焼けを見ることができはずだ。

暖かいミルクティーを飲みながら、日の出を待ったが、その時刻になっても水平線の上には厚い雲が掛かったままだ。今日は無理だなと、目を閉じてうつむいた瞬間、まぶしさをまぶたの上から感じて目を上げた。それは正視できないほどの光だった。雲の切れ間から、光の筋がサーチライトのように、皆のいるレストランを照らして、部屋の端から反対の端へと走った。光の筋はすぐに、四方へ八方へと広がっていく。雲は赤、オレンジ、紫へと色を変えた。いつの間にか集まったカモメが空を飛び、鳴き交わしていた。強い海風が吹き始めていた。日の出だった。

杉本の最後の疑問とは何だろう？

それは、「神はなぜ、ある人々を裁き、滅ぼすのか」というものだった。

「万民救済」という言葉がある。

どんなに悪いことをした人でも最後には必ず救われる、という考え方のことだ。

つまり、アダムとエバも、ニムロデ※も、サタンや悪霊たちでさえも、神は、最後には罪を許し、救いを差し伸べるというわけだ。杉本はこのような考えに共感するところがあった。「だって、滅ぼすなんて可哀想だ」と思うのだ。恐れ多くも、神の裁きの仕方に口を差し挟もうというのである。

※ニムロデ……創世記にでてくる、神に逆らって人間の王のようになった人。狩をするように人を殺した。

「コーヒーハウス」の説明は万民救済ではない。神をよく知りつつも、故意に反逆して罪を犯す者たちの中には、滅ぼされ、復活の機会さえない者がいる、というものだ。これは確かに理屈に合った考えだ。そうでなければ裁くという意味がなくなってしまう。

それでも、それでも……と、二つの考えの中で杉本空歩は揺れていた。長い間、折に触れては頭に浮かび、考え続けた。そして、やはりイエス・キリストに行き着くことになった。
このように書かれている。

キリストは罪を犯さず、その口には偽りがなかった。ののしられても、ののしりかえさず、苦しめられても、おびやかすことをせず、正しいさばきをするかたに、いっさいをゆだねておられた。

(ペテロ第一 第2章 22節、23節 口語訳)

イエスは理不尽な扱いを受け、人からの裁きにより死なれた。それも残酷な処刑により殺されたのだ。イエスは、しかし静かにそれを受け入れ、「正しい審きをする」神にすべてを委（ゆだ）ねたのだ。この言葉に本当に出会った時に、杉本は肩の荷が、ふっと軽くなったのを感じた。

そうだ。イエスでさえ、裁きは神に委ねたのだ。こんな自分が、それもまだ見ぬ未来の神の裁きについて思い惑うとは、いったい何ということだったのか。恥ずかしくなった。

その小さく静かな悟りは、杉本が沖縄の夜明けの空に見た、突き刺すような光の筋ではなかった。それは、電車のつり革につかまりながら見た、わずかな光の放射だった。しかし、それは、光の道の歷程への第一歩を標（しるし）付ける確かな光でもあった。

光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬように為よ、……光の子とならんために光ある間に光を信ぜよ

(ヨハネ第一 第2章 35、36節 文語訳)

29 母

今年の正月、杉本の家族は母のいる長野県の実家へ帰ることができなかった。子どもたちの学校の用事が重なってしまったからだ。年が開けた一月の週末を利用して、杉本は自分だけ帰ることにした。いつもは杉本が運転する車で、のど自慢大会が続く、にぎやかな家族とのドライブになるが、今回は久しぶりに電車を選んだ。大宮駅から信越線に乗り込む。学生時代、車がなかったときには、しばしばこの列車を利用した。

高崎を過ぎて、碓氷峠（うすいとうげ）に差し掛かる頃に、駅弁の釜飯となめこ汁でお昼にするのが定番だ。峠を越えると景色は一変する。冬の夜ならば、それこそ「夜の底が白くなった」というところだ。湿気で曇った窓ガラスに、思いついた絵や言葉を指で書くのも楽しみの一つだ。軽井沢は凍えるような雪景色だ。ここから線路は緩やかに下っていく。小諸を過ぎ、目指す駅は上田だ。近づくと、浅間山や湯の丸山が迎えてくれる。なつかしい風景だ。

この帰省には目的があった。杉本は母に自分の決心を伝えたいと考えていたのだ。

列車の旅の間中、過ぎていった三年間を振り返っていた。依田純一との偶然の出会いが始まりだったな。いや偶然だったのだろうか。神が導いてくださったとすれば、そのときは、確かに神は自分を見ていてくださったんだな。それなら嬉しい。

父を知らない杉本にとって、神を父と認識し、父に愛されていると感じるには努力が要る。父がいないことは大人になるまでは気にしなかったが、自分自身が父親となり、どうしたら良いのかと惑う時に、自分の父の背中が見えないことや、太い手で抱きしめられる記憶がない少年時代が、意外に大きな影響を与えていることに気づいた。

だから、いじめられ虐待されて育つ子どもたちのことを思うと悲しくなる……。その心に残ってしまう大きな傷跡を思うと、居ても立ってもいられなくなる……。

教師時代に起こしてしまった学級崩壊の原因だ。

我を忘れて行動してしまった。

あの時は感情的に過ぎた、と後悔している。

いじめられる子供たちの心の傷は誰も癒せないのかもしれない。

でも……今は、答えを持っている。

そう、神様はこんな約束をしてくださっているよ。

（神は）人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のが、すでに過ぎ去ったからである

そうだ。悲しい過去はすべて必ず忘れ去られる。たとえ今の人生がうまくいなくても、神を忘れてはいけない。神をうらんではいけない。だって神はそんな方ではないのだから。君も光の道を歩み始めてごらん。僕もやっと歩き始めたばかりだけどね。一緒に行こうよ。必要なのは、正直さと、謙遜さと、心の飢えだけだ。他には何の荷物もいらない。お金も要らない。この山登りは苦しい時もあるけれど、負けないで歩き続けるならば必ず誰でも頂上につける。そこでそよ風を髪に感じながら、すばらしい雲海と山々の頂を見ることができる。暖かい味噌汁を作って飲むのが、僕のお勧めだ。がんばろうぜ。

上田駅に降り立った杉本は、厚手のオーバーを着てきて良かったと思った。同じ冬の日でも埼玉と長野では寒さが大きく違っていた。駅前のターミナルからバスに乗る。十五分ほど走れば見慣れたバス停に着く。そこからさらに十分ほど歩けば、母が待つ家に着く。

家の前には小さな川が流れている。以前は草の生い茂る土手を降りて、川辺に下りることができたが、コンクリートで固められてからは降りられなくなってしまった。渡してあった橋は小さな木の橋で手すりもなかったが、今は手すりの付いた鉄の橋になっていて、そこに車も止められる。橋を渡った右手には深い竹やぶがあったのだが、だいぶ前に近所の竹やぶすべてに花が咲き、その後は皆枯れてしまった。あんなに深いやぶだと思っていたのに、無くなってみると狭い土地になってしまった。

橋を渡って左側に、古い家はそのまま建っていた。その奥に小さな畑も昔のままになっていた。畑の傍らの、土手のすぐそばに、あの柿の木が、これもそのまま立っていた。ずいぶん小さくなったように見える。そこここに、雪が硬くなって積もっていた。

母は畑で作業をしていた。杉本を一人で育ててくれた母だ。母のことを考えるとき、杉本は涙が止まらなくなることがある。面と向って、ありがとう、なんて言ったことが無かった。贈り物だってしたことが無かった。親不孝な息子だった。

母の智子は杉本に気が付いて笑顔になった。

「あれ、空歩かい？」

杉本は心の中で母に報告した。

「かあちゃん。俺、クリスチャンになるよ。……生んでくれて、ありがとな」

杉本の視界は涙でぼやけてしまって、近づいてくる母の笑顔を見つめることができなかった。魂の底から込み上げてくる大きな息が杉本の胸を膨らませていた。

北浦和コーヒーハウス もうひとつの天路歷程
<http://p.booklog.jp/book/80463>

著者 : kintokimame 金時豆太郎

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kintokimame/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/80463>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/80463>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ